史末

十一　十二

秋二　秋三

夫木和謌抄巻第十一
秋部二
題
萩　女郎花　薄　苅萱
荻　蘭　草香　秋花
槿花　秋野

萩

題不知　中納言家持

万八 わかをかにさをしかきなく初萩の花つまとひにきなくさをしか

同　読人不知

万十 てもすまにうゑしもしるくいてみれはやとの初萩さきにけるかも

光明峯寺入道摂政家百首　早秋　従二位家隆

こ萩のひもとくれはすゝしきにおきそむるしろたへの衣

題不知　坂上郎女

万八 いもかめをみそめのさきの秋萩はこの月ころはちりこすなゆめ

寛喜中人家　民部卿為家卿

おもかけもみそめのさきの花のえまよふつゆにおきもせてしも

為家卿百首　　従二位家隆卿

露なからをらはをらなむさきまさるこゝろみえそめのさとの秋萩の花

詠風哥　　人丸

百十 萩か花ちりなんのちのひとしのみぞそくすれはよ秋風ぞふく

正治二年百首　　後京極摂政

小萩さく山の夕けの風すきて霧りの寄せ目にしそうく

詠花哥　　読人不知

百十 思ひくる秋風ふくことにわか大野は萩の花ちる

百首哥　　前中納言定家卿

かさしとしをらはしわか大野の萩の露ちらてをはなほさらしも

大寶二年太上天皇幸于三河国时哥

長忌寸

五 ひくま野ににほふ榛原入みたれ衣にほはせ旅のしるしに

千首哥　　民部卿為家

ひくま野によるとも萩の花見ればわかさてかへる旅衣かな

寛元元年女御入内御屏風

前中納言定家卿

ちる人の袖の香もさそはぬひくまの野の秋萩の花

百十 さかりなる野辺の秋萩時しあれはうつろはんとや露のおくらん

詠花哥　　読人不知

百八 我ならてふりはきてしれ秋萩はなほみかよりおもひなれてむ

題不知　　舟山國人

建永元年仙洞哥合朝草花

従二位家隆卿

続千秋上
山の神をけさもやしろはなにかはゆきかふ袖の萩のにしき

文永二年白川殿七百首

正三位知家

旅人の袖きてのこれにたえさ衣つまはらふ神の色ぞみえける

題不知

中納言為藤

百八
たか原の野邊の秋萩のなかをおつるきよきさきすぎ人

百九
旅人の袖つきしよりあさき萩がはへにかへりきたるまとの色や

詠花并

読人不知

百十
秋風は日ことにふきわたる高圓の野邊の秋萩ちりまくも惜も

堀河院後百首

前中宮河内

たか原の野邊の色もゆる秋萩の花すり衣きて人ぞみる

正治二年百首

源師光

さか原の野邊の秋萩りもいまさかりなひもまもなくて神さひ

題しらず

高市黒人

百十三
いさやこら大和へはやく白すげのまのゝ萩原手折てゆかん

堀河院後百首

大納言師頼

あさたらわさゝの露わけて野の萩原花ぞちりける

久安百首

崇徳院御製

みちのくのまたの萩りをけふみきてこそこゝろのまの萩原

題不知

読人しらず

百十七
すゝきちる風さとの野きまでもまかりゆく

文治六年五社百首

皇太后宮大夫俊成

あらしふく人まをやゆけば野原の萩さくとをの秋萩の花

旅衣はぎきえやきの萩原すりうすにきてもなれ衣

題不知　　読人不知

万十　かりかねのきなきしなへに萩はちりぬとさをしかのこゑもうらふれにけり

文應元年七社百首　　民部卿為家

かせそよくをのゝすそ野のすりわきてきの花ををしみかねつゝ

題不知　　読人しらす

万十六　よこほりしわきつの萩よにほひよりもれぬこゝろのあさかりし人

家集秋哥中　　顕仲卿

住吉のきしの小萩をまつとてや波のさきはさきてゆくらん

住吉社百首歌合　　慈法和尚

すみよしの浜のむかひのきしのまつ吹しをれたる松の風

文應元年七社百首　　民部卿為家

袖かけてをるとつゝまし住吉のあさゝはをのゝ秋萩乃花

題不知　　人丸

万十　あき川のおほあらきをわたる萩の花をわりさねまくものかは

同　　読人不知

万九　をくれゐてわれはやこひんいなみのゝ秋萩みつゝいなん子ゆへに

万十　をとめらにゆきあひのわせをかるときはなりにけらしも萩の花さく

万十　ふちはらのふりにしさとの萩の花さきてちりにきまちかねつゝ

万八　くれはおもひあさくもあれや川ちかきあきの萩はみちにけるかな

六帖五　から衣きつゝ川田の山乃萩ちりて衣にうつりにしかな

万八　　石川廣成

つまこひにしかなく山の秋萩は露しもさむみさかりすきゆく

家集　　人丸

万十　秋萩をちらしともきくあのかせはひとりわきてもをりてかさゝむ

三十首哥人〻によませ給ひし時萩を詠

入道前太政大臣

うちしく月のひかりもうつりけり明の庭の秋の夜の萩

題しらす入道二品親王家にて秀野萩

従二位家隆

立田姫すその野の萩のうつりきにそめもやらむ秋の夜すから

千五百番哥合　宜秋門院丹後

立田山木ゝもいろゝも見えぬまてすその萩に秋そみえける

家集　人丸

夜をさむみ衣かりかね(?)なくなへに萩の下葉もうつろひにけり(?)

題しらす　光孝天皇御製

さひしさもまさりけるかな秋萩のうつろふ花のちりすきゆけは(?)

延長二年左大臣家屏風さうのあき　貫之

まとゐせし人はありけりきみえすめりすゑまき秋の野の萩(?)

題しらす　読人しらす

秋風はなやふきそ我宿のあはれ萩のもとさらん(?)

中院左大臣家哥合萩

秋風はやゝふきまよふ萩かえもちらまく惜しきこゝろはしらて(?)

秋萩の花のさかりに川のせにきてかへる鹿の声きかせ(?)

承安二年法橋哥合萩を(?)　快雲法師(?)

家集　伴坊(?)

ゆきさくさ野はゆかし秋萩のうつろふ花のまたちりぬとも(?)

さ湖りも妻よひかはす成にけり比野の萩も末葉しらみて
ねぐらひてつゆひくあつのあきのこゝろもをしまれけり

秋哥中　修理大夫顕季

ちりそれぬむものゝ小萩さきそふ花の袖よりまて

藤中納言通房

わさむしれぬ山のふもとの秋萩はにほひそめそこなろの上かよひとそくろ

正治二年百首哥　式子内親王

よせかへる浪にみたれすりみるれなつかしむら萩もうつろへつゆのうへ

千五百番哥合　西園寺入道太政大臣

きりくもなかりて手すりにあさのくものこゝろえきそくらし

久安百首　待賢門院安藝

風ふけは萩のはかえをまちわひてにほひねく玉の露そこまらぬ

常盤井入道卿　萩

源仲正

ゆきてこしはまのなかけいしやこのしとに萩さきそふ

家集萩

あら浪はよはに立きてあさなきのむかひの萩をまつ

家集　源頼政

風ふけは萩のさえにそよそあひてえもいはれまのみさきそろ

草花露深

おく露のつきのとなかめ秋風にあかつやまの水

嘉禄二年百首萩　民部卿為家

人つまのあさの野のにほひそめたるうつろひて萩のはな

大治元年八月摂政左大臣家哥合　忠通

源雅光

あきのゝに花さくはきのあらしをはをしむかひなきまてそ見る

天永二年七月内大臣忠通家哥合草花

年ふれとかはるものゝよにふれとあかすめつらしき萩の花

建長二年八月十五夜三首哥合

後嵯峨院御製

さのみにはつゆやめなれんそのはらのうつろふまゝに秋萩の花

同

冷泉太政大臣

たかためにたちのゝ花にみたれけき初秋萩の花

衣笠内大臣

現存六 秋萩

露わけてをらしいかにしられぬをあさちにしかぬ秋萩の花

永久二年太神宮禰宜哥合萩

読人不知

みさとにはまけしいのちのなかの萩はさきてもみゆる

家集寛元三年

修理權大夫

見その花まさの秋くさをとりたくるはきのみなれてはえもはれ

秋の野萩よりみて

萩もとをりけてとをしのみちをわらしとかへるらん

後法性寺入道関白家百首

皇太后宮大夫俊成

あさしやつなけきのへをたつをのゝなかまつ萩の花も

家集たき

和泉式部

見ようにほふ秋をともゆかりのためのいろのはらの萩の花

風さらみちる萩のうへにはらはらとちりてそ見ゆる秋萩

あらしふくまかきの風にみたれつゝ萩のもとにやすみてとかや

同集　　　順徳院御製

むさしのゝ萩のうへこす秋風にちるその露やまさるらん

能宣朝臣

むさしのゝこまありし人まてこそ萩のさきけるをと

しらは

むさし野のむらさきの萩をみしよりくさかんなめとこそのあき

天延元年内裏屏風哥　廣沢池

元輔

廣沢の池のほとりの秋萩は露のをきける花をかりけり

家集草花移秋池　源仲正

池の水のたまもは萩をさかりとみえて萩のをけをと

天徳三年九月十三夜庚申中宮女房哥合　萩花

元真

高砂のおのへの萩をかりつゝそ忘れぬきぬにすりてきにけり

源　讀人不知

秋風のさとの萩も秋のよるによそにみゆる萩原

親子内親王家哥合萩

さをしかのすさくゆふへの下萩は花をちらしてかくてもあるな

秋哥中　中納言兼輔

夕やみの秋きにはみなかく人かしかねしきこゆらし

天暦二年前女房哥合

よみ人しらす

秋くれはいかにしかなくて萩のしたにむしこそなきてのこりけれ

家集秋哥中　元真

みやまきれおほえすなりても散露は行きやとひく萩か白露

家集草庵内草　頓阿法師

わきかねもちりつゝまたしみりまちやまれいとわかく萩か露

秋哥中　前大納言為定

秋のゝの萩の葉ともしらさりつちくさかれともおもふ白さま

貞元二年八月三条左大臣家哥合前栽

萩花　兼盛

しらさゆの露ともえんのゆふけよその村すゝきの萩

寛治五年内裏哥合萩　源盛雅

秋の野はたゝにはきの萩されいろゝつゆもまさき錦かな

家集萩を　恵慶法師

こむしさえたる袖ゝけし夜をとみゆれは秋の野の萩かり

秋哥中

秋すゝ人ことさせはりきとしかそみさきちる萩さかり

家集井のしふ亜をとりて

たかふしもまくられぬねよるをふしてちる秋の萩か露　頓阿法師

為家卿百首　如願法師

見らわすゝろのとものの露しまちうちはなまたれ秋萩の花

堀河百首　皇太后宮大夫俊成

ひとりやのそてはたのみたつらん霜の上下萩のえの萩

貞応三年百首野亭萩　民部卿為家

の或本の家集同所廳
禁秘抄　包々草花
栽之

秋萩の花のとさしの色に出て少くも知るさの人の露哉

大神宮百首御哥　後鳥羽院御製

花そのゝちくさのほかに咲にけりさらはわかさとさき秋萩の花

北野社百首御哥

露しけき萩のすゑ葉すりみたれさてやさひしくまつむしのせん

寶治二年百首萩露　後九条内大臣

まきもくの神のはふりか色そへてうつる萩の朝露

同　従三位知家

人はいさあくさいの露はこのまよふきしき萩か花

続集　衣笠内大臣

村雨にくもるときさへ山すその秋の夕きの花

文永元年五社百首　民部卿為家

去人の花をも見すそなきぬへきよそにまの萩か花

たゝ神にまかせつるらんさゝなみやゝ秋萩の花

かり衣をさねく神をまつりゆくかさのもしれ秋萩の花

五十首　従二位家隆

されはこそいはしてもまた思ひたちしかさの衣萩か花もとり

天永三年四月吉合歌　讃人家

我せこかきてもみつへき花とみなあつ秋萩のきのまのよそに

百首哥名所秋　土御門院御製

露なから秋萩えたさえてきいれけり宮城野の風にかへさん

白露の宮城野の萩のそれいかにたれかはしらん

洞院摂政家百首早秋

従三位範宗

をきそむる露のおとこそきこえさらめ　みるきはしるき萩のうへの花

建保秋十五首哥合　秋花

僧正行意

ゆきまよふさの野原のこゝろきえ原にはさらに尋ねもいまやゝらん

文永五年九月十三日内裏哥合

徳大寺大臣

あさくまさひ秋をそてにするゆふくれはひいろのゝきの萩のうへ

文治六年五社百首　鹿

皇太后宮大夫俊成

をの山のいろのことしとおもふらんまさきのかつらいはふきあらし

寛元々年十禅師哥合　野径秋露

右兵衛督為教

あさちはら萩のこゝえさくらんひきすゝむもたつまて露そ

同

秋さりはをりたちのそのゝ露さへゆかしとそおもふ秋萩の花

後九条内大臣家基

寛喜元年五十首恋哥

衣笠内大臣

秋そともさらにこゝろそ露のいろ　まさりてよきえのみ

最勝院入道二品親王家五十首

禅性法師

詠鹿鳴

うつりゆく色そあはれの露のこゝろさへ　秋はいかにゆきなれる

後人やら

白露をとこをおきまよへしはなのいろをましてそ萩かえそ　ひせん

建長七年顕朝家千首栽萩　藤原伸遠

うゑをきし花のこゝろをみよとてやいさくさもおなしおもふらん　そひせん

正治二年百首　源師光

明日もまたこゝろやまつらん鹿のこゑこれかゝらひよりそ萩の花も花

家集　大納言経信

白露のたまの林の萩もかれてきえうらその道をまさる

建長七年三十首　権僧正道

萩さはねてやこまむしはそめのこゝろかたのゝ小萩

君臣歌合　前中納言為家

はなをそめつゝ小萩かもとにうちきますて咲へし風に花を思

嘉元元年十月南殿百首萩　為實

下葉こそ花はさきぬらむもよそれゆへきまさる風の

千首歌　民部卿為世

咲初るはこの世のならひとてきみをしも風のいろにまさし

文永五年毎日一首中　同

花の身はかなくもやのてもなくきくさきく宿の中の

同七年毎日一首中　同

とりよ山のやの宿の秋萩と庭のそをしらぬ

毎月一首中　能誉

小倉山すその野萩のはやおのへのちかへにあまくらん

千五百番歌合　右大納言忠良

雲かゝる梢のみえさやとこ山萩の外人への萩の錦

元永二年七月内大臣家歌合草花　判者顕季卿

基俊

白露乃野分のむすひきぬかれときなからそ花ちり

千五百番歌合

皇太后宮大夫俊成

浪のよるかりきともみゆるのしまかさきに秋萩の花

建保三年右大臣家百首　正三位知家

小萩さくのしまかきよ風もてゆすり浪よるのかけ

内裏歌合　同

旅人のこのしたかけも露さえにうつる萩か花

百首歌

慈鎮和尚

さよ川のあかれに衣のきのかたりなかえて

百首歌之五首中　藤原為家

秋萩乃さきおほふやけ人のむしろにゆく神の花

布引百首歌

法親王

みよしのゝ法のまか里の萩か花すりし布引の瀧

野外萩　家

藤原為資

白露そうつりましめむしさきかねよるこの秋萩の花

女房花

題しらす

人丸

わきもこか衣のすそにこの木のもと露よりたゝ浪も

家集秋哥中

中納言家持

秋さり衣にすりし萩の花よりかへりておきてとしさの花まにて

家集　伊勢

やまとめの袖ところゆふとしきてへしまてもみてて

昌泰元年亭子院哥合女郎花

讀人不知

わくらはのつちの下まて秋まちて花のすてにまつ露を置

秋の野の女郎花をしるへにて折まとはれし袖やたえらん

立ちよられたのめる女郎花秋の花の色にそよまかく

女郎花折りしとりことに秋つけのはといひしをなくさ

同三年五条関白家哥合女郎花

うつろへはおもふありともをみなへしのそのうさこそにすまさらん

延喜十九年八月東宮女御哥合女郎花

白露の置てそめつくをみなへし色こしとまりにもみえなん

家集　山家女郎花　元真

風ふくと山さしなみをみなへしうつろふらてへなまち

文治六年百首　仲實朝臣

又さらやたしかにおもひなく秋なのつきをみなへし

久安百首

花園大臣

あたにこそ川にもしすまをみなへしたちよわるにもをみよ

家集

後京極

袖に花をそめつく露とおもひをかけてをみなへしやさむき

秀陽女郎花

永久四年七月忠隆家哥合

藤原顕輔

秋の野をしらされわかきをみなへしたれとかたさよそをみ

あさりし伏見の里の女郎花誰にかたらひてそちる

保延二年權中納言經定家歌合

藤原忠通

むさしのゝをみなへしおきまよふ露をさなから秋の夕暮

女郎花　藤原道經

[illegible]
めかれせぬ花のひもとけてたれかこの野へにまさるらん

文治六年五社百首　皇太后宮大夫俊成

をみなへしや伏見の野への女郎花しられよみるとてらし露そおけき

堀河院御時百首　中納言國信

又さきにみゆるの里の女郎花みるへしあてもなくさきにほふらむ

同　中納言師時

[illegible]

同　修理大夫顕季

秋霧のたちかくれなるこの野へのをみなへしおもたしとそ見る

同　俊頼朝臣

みちのくのをかのの女郎花さかれて露にみたるらん

永仁二年大神宮祢宜歌合女郎花

荒木田忠延

たくひなきをみなへし人のけふの人のわたりける

此哥判云かさしの野への女郎花

柄のまゝにまかりきてはまたもしきりにあかぬ

秋の夢のうち

をのしきのとそ

中務卿

[illegible]

院当座歌合女郎花

如覚法師

秋の野の花さく原のをみなへしひとりはけさの露におもる

大嘗会悠紀方御屏風

権中納言匡房

かすかのの野の原のをみなへしのりよりとみえしかは神

大治三年八月広田社歌合女郎花

大夫典侍

道のへにたてるをみなへしを見るからになをあやしくも神そしる

禖子内親王家野宮歌合

藤原有忠朝臣

小倉山秋のへの女郎花も霧の下よりまつりけるかな

同歌合判者　顕

霧のまのおきれぬ草とはなのみそとこへしまは野辺に[illegible]

家集　稲荷　中納言家持

いなり山秋の野原は見るからに女郎花をきよきもいかに見えける

秋歌中　新院御製

後二条内大臣

おしなへて人はかたのをみなへしもとよりそ花のめてられけれ

同歌林　[illegible]大進

君か川みちの見きちのをみなへし流にたてなる影や見える

家集　前大納言公任

白川のみるへにたてる女郎花もしらの衣なかや神を見らん

秋歌中歌林　源仲綱

猿沢の池のそめしをみなへしもとはさてそ神をみるらむ

永久四年七月歌合女郎花判者仲實朝臣

源經兼朝臣

きゝはつるかたのゝその女郎花むかしためしにまつひきつらん

同　藤原為隆

女郎花はなのさかりをきゝしかはこひしくもそのさかりなるらん

此哥ハ判者たゆみくてしかひくくよめることをたん陳

右歌なくてすそのいつしかましとよろくよめる心也

とて持とそ

家集　藤原長能

山さとの田くらはなたてをみなへしまれにひとりのこゝろそみる

此哥をくりこまちやけといふ秋こそかりしき

よはひけるはかくこの花にまさる女郎花ものさてよ

とうてよめるとそ

小大君

雲のうへはうへのむつきとをみなへしくらきの秋のかさなり

此哥ハちかいふにほりのきみをはむかしのおもひに侍る

よしさかれ女郎花をさしてあさきのものやたことき

たつくらりひとつせさりされはよめるとそ

家集　伴親大輔

あきのき野にいまつしてをみなへしいさかなきはきらん

久安百首女郎花を　前参議親隆

いろのまつてかのをみなへしなにいはしのなくさり

同　待賢門院安藝

さかてさよなきさりといはれのよ風にまさるとをみなへし

同　　　　　　　　　　　上西門院兵衛

あさきりにまかれのよそまをとゝめぬ[illegible]

建元二年白川殿歌合　野花

従三位頼政

あきかせのいとそれのへ女郎花も露のおきそめて[illegible]

保延□年権中納言□定家歌合　女郎花

左京大夫顕輔作

をみなへしいとそれのかきくもる[illegible]

同　　　　　　　藤原道明

むさしのゝはなさきてまつ[illegible]

建保三年名所百首　　従三位行能

むさしのゝきりのまよひのおとこそ[illegible]

秋歌中　　　　　基俊

ゆふされはのへをあきかせ[illegible]

久安百首　　　　大炊御門右大臣

女郎花露の衣をかさねて[illegible]

元永二年七月内大臣家歌合　草花

藤原道経

あさしのゝ萩のきやここちなん[illegible]

永久四年七月忠通家歌合　女郎花

意尊法師

あさしのゝよそめきさて女郎花も[illegible]

建長三年八月十五夜三首歌合

後嵯峨院下野

なつし野の庭にはなれぬ女郎花我まゝに露をわけてたてるは

永安五年三月前家にて歌合草もみ

法橋顕昭

我屋とにうつしてこそはみるへけれあたりの野への花のにほひを

仁安二年八月経盛家歌合草花

寂蓮法師

都まてなひきもせなんをみなへし野への色には身をは名たてし

此哥判者 清輔朝臣 云 ちゝ名とおもひかけなきをみなへしなかなかにこそ色まさりけれ

家集女郎花を

権中納言長房卿

ゆきさきにこの花のすゝめてとまりけりまれにもや秋の山辺に

祇園百首女郎花

皇太后宮大夫俊成

こゝ秋はあさちのしけるくさむらに名をたてゝなけつゝそみゆる

百首

寂念法師

をみなへしおほかる野へをわけぬれはたちまち風にとみにみたるゝ

かつ題にたとへ身の

同

見る度のくさむらの風にそよくをみなへしおもひをよする人のあるかな

三宮奉納和歌楽を和らる王の縁

かつさえぬ秋の風にもみちるへし花のかたちはいかにつくへき

権僧正公朝

家集池辺女郎花といふ心を

西行上人

池のおもにかけをさやかにうつしもてみつかゝみとみる女郎花かな

女郎花を

同

大方は野への露にはしをるとも我なこそあれ女郎花哉

月前女郎花　　同

月のよは花よりさきてめつらしもそのさまのさまにうへさけり

女郎花　　同

をみなへしなまめく野辺におれふしたれとも露やこほれん

賀茂社百首　　慈鎮和尚

おのへなるさつきそよとをみなへしなひく風のまゝにまかせて

文治六年五社百首　　皇太后宮大夫俊成

をみなへし露をはたまのかさしにてたてりのまゝに立やとらん

あさなあさなおきゐてたれをまつやらんなまめきたてる露けかるらん

家集秋哥中　　従二位家隆

又みし花は原のをみなへしふしやなれ(?)にほふらん

千五百番哥合　　後京極摂政

旅人のいつのおもかけしたまくらはむすひかへつゝ女郎花哉

同　　寂蓮法師

女郎花なまめきたてる秋風によわりつきは露乃みたれとひ

文應元年七社百首　　民部卿為家

めにちかくをかの原の夕まくれあやなく君そ心やみまし

ほのかにもむかしの野への露をよそにしてやさきてたつらん

あらしふくそのゝ花をともしらてわか君もさすかなき

女郎花　　鷹司院按察

たちこめやまのゆるをつのとこ(?)されはなのひもとくらん

百首　　寂蓮法師

うきたるこころもかの女郎花もさすかにさきにつゆこほるらん

保延四年経定家百首合女郎花

左京大夫顕輔

我か心人にしられてをみなへしさかりもあへぬ花のいろかな

題不知

中納言家持

万十七
見わたせはをみなへしさかりをみむとあきゝぬとさかりのへにゆきぬ

同

万廿
たかまとのをのへのはきのもみちはにつゆさけからん女郎花かも

同

万十七
女郎花さくさはにおふる花かつみかつてもしらぬこひもするかも

千首歌

民部卿為家

萩の花をみなへしをそみるへきかなれやたけのはなやもみちしらん
暁はつゆをおもみやをみなへしすそのゝはらのいろやまさらん

文永三年毎月一首中

あつさの露をうけさや女郎花もおもふこゝろはありそめし花

永久三年太神宮祢宜歌合女郎花

読人しらす

露おもみあさのくれたをみなへしたましまつかてあきつらむ

同四年七月雲居寺歌合女郎花

瞻西上人

秋くれはさかりのいろをみなへしいくよもまたてまつらめてさくらん

題しらす

法親王覚性

雲歌
秋乃田の畔にさひしく女郎花いかなる人やまきはしめけん

同

読人不知

立
女郎花さく野におふるしらつゆのけさはいかにわかもとめゆくよ

万十
をみなへしこゝろをしたにおもふあさつゆのいつかはそてにむすひをかまし

百十二
神なつきしものあさはにしられぬをとこへしをしへてあきさむしのこるけく

左右寄合
三草花左右寄合
従一位良教公
露おけはきさくらけれ女郎花かいる袖にもよ契をきけん

千首歌
民部卿為世
秋のゝのわきたにつゆをとこへしいくよかとゝ家のつくらん
たなのころ山本まそしめ女郎花かすみくみて見れは

修積朝臣
さしらてすゝきかたよは秋のもとをこゝろへしとそたえりはもくく

永久二年大神文殊百首歌合女郎花
読人不知
秋くれは君くとゝ女郎花もよものゝへされにもはとこくわるにまる
かみ山ものひの野への女郎花すてゝとゝいろへまさる

[illegible]

千首中
民部卿為定
いくつまたのむへき人やまかもみ山秋そよそはあき女郎花かる

同集
中務卿のみこ
たかまく秋野もゐの女郎花おもひさしたるらん

六帖題歌
同
しらつゆのこすゑ大野のをとこへし白露はけてはなほならる

同抄歌合女郎花
上西門院兵衛
身をつめいわされとそこころをみなへし人もちすらのかほそさおるて

薄

題しらす　人丸

一万十
さをしかのいるのゝすゝきはつを花いつしかいもかたまくらにせん

寄露思恋　民部卿為家

をれふさこちこつゆのすゝきはしのふともいはてやものゝあはれをしれ

千首中歌　同

かり人のいるのゝもとくさうちなひきしたわけいてゝ秋風そふく

弘長元年百首歌　信実朝臣

初尾花神のみむろや秋風のふくのすゝき人まねくらん

六帖題　正三位知家

新古
かりそめも袖をぬれとや秋のすゝきにかりに結ひしたまくらかな

隣一夜　読人不知

はたすゝきは万葉に
此隠
書出三睦隆息佐
こゝろにはすゝきの
ものすゝきは万葉に
のことなりしらぬ

六五
あれ行まくらしのすゝきまちせんみなん色のあきの　忠岑

堀川院時百首

枯尾花（?）ふく風のはらに露はかりなからをやとる　権大納言公実

永久四年百首

又六
見こそりてかれしこ（?）もはまとの秋風にまねくすゝきの　神祇伯顕仲

建保六年百首歌合　後九条内大臣

咲初る花すゝきのつゆけきてまたまねくるかな　同

弘安元年百首歌　同

秋萩のこゑのもとくきあさのはすゝきほのかに　家

柿本新撰百首　同

山かのゝ野原にまくらきつむすひ中かれ枯尾花そよく

○忌のけかるそは 作者の誤か 直前の入江遠ほかり

住吉社哥合　落雁　神祇伯顕仲

いかにせんまのゝ入江にきてみれはなきさにつむしほのかほを　落

同集秋下　後京極摂政

うちなひく入江の尾花みえて夕なみこまよふまのゝ浦風

嘉禎三年七月大臣家哥合　野風

法性寺入道前関白太政大臣

わか宿のをはなかうへを風ふけはいなむしろの浪かとそみる

長多僧入道二品親王家五十首

野宮左大臣

山田もるやたえすゆく余所の川のなかれにすまぬうつらなくなり

南北百番哥合　慈鎮和尚

あさ川の夕くれかたに吹そめて神なひ山のせまかりの風

文治六年五社百首　皇太后宮大夫俊成

露はらふあさのゝ大野の志の薄まつくらかはかむとや

いつはりんいとこのをみなへしの落行きかやかれてくまれぬ林

なりゆくいろみのつのむら荻すゝむ浪をそみる

御集秋中　土御門院御製

をはすゝきまてかほひしき紐をおきてすゝしきは原

題しらす　藤原経平朝臣

夕霧かのくほ遠ての林の葉も秋をそいく

家集　野霧　権僧正公朝

あきのむら小野の秋の花すゝきまてはたすある

御集　中務卿親王

あさ川のきてのとこの霧まよひて夜さへたてゝ

二月 婦猫ふき ぬすま風 用

嘉元二年百首 露　藤為相卿

思のへや露ぞくだくる秋風の雲の柳のかげやけふろ

文應元年七社百首　民部卿為家卿

かよはまくずの露のおもみに風わくる袖に秋の夕ぐれ

風わたる浅沢小野の花すゝきしらつゆつくつかゝる白波 用

承安五年七月右大臣家歌合 野風

源仲縦

たきゞ風つよくの浦に吹にせば遠里小野のおもかげぞみる

貞應三年百首　民部卿為家卿

白露やまだ咲そめぬすゝきのすきぞ朽るにおく

六帖題歌 秋野　中務卿親王

秋花に吹くの小野を見わたせば世はせよてよ秋の白波

保安三年九月内大臣家歌合 野風

堀河院中宮上総

風わたるみのへ野の尾花なびきすゝきとゞまる浦波ぞたつ

永久四年七月雲居寺歌合 露

三宮 相模

いとしくはまだわれのおきまよふ露のあさきつゆそぞ

家集 草花随風　源有仲

花すゝきさかりみえ野へまねきくる人は風に開きて秋風ぞ吹く

永久二年大神宮祢宜歌合 露

よみ人しらず

秋生らくはかはしもすゝきかかるつゆぞよひ

同四年七月忠隆家歌合

源経兼朝臣

ゆふ霧のそこひもしらぬ花すゝき千里もちかくすむ月のかけ

百首の　登蓮法師

見し人のおもひの野辺にすすきかひくは昔にかはれ

永久四年忠隆家歌合薄　藤原国親

いつしかとしけれる杉のしけきこにしけく秋まてまねく花かな

元永二年七月内大臣家歌合草花　藤原顕仲朝臣

夕霧もむすひかけたるしのすすきはこねのおくにこもりおほけに

永久二年太神宮禰宜歌合薄　よみ人しらす

津の国とみてもきの野へのしのすすき秋はまねくにかたり

住吉社歌合判者　神祇伯顕仲

たまくま大野をよきるしの穂すゝきしけはいつのあかりかほきかな

源公忠朝臣

なひくをは袖とみてしおなしくは我をまねきし

延喜御時おほすすきちらむといふことをよませ給ひし時よみて奉る

家集に月ならぬ思ひに人にあひくれさる詞にてけく

藤原義孝

たますきの穂にひかれる詞の野への秋けすみ川に

家集秋の中　西行上人

いとすすきぬはれてあはの穂にいてゝ野へのひかりもやかれぬる

是下脱けりかな　真観言実経卿
おけかふれとも　こゝにいれて秋の野にすてぬうつら鳴なり

三十六人哥合　平忠度朝臣

花すゝきほのくにしるしおまねく風吹く秋の中くさ

家集　和泉式部

うつろはん我やもとめへきすゝき花のたもとのまねくらん

はなれて津国難波わたりて舟をうかへ行くたへはよくさき

ほかの国よりわひてくるといひ侍りしかはかりてとゝこし

まねきとまねくおまねくあはれなりし秋の袖とそみゆ

山さとのいとゞ花の花石山にまうてけりしに山中にやまねくや

をみなへしなみの尾花の秋まへにたつるにまねくしと

ことにまれになりてすきにける人なきあはれに

またいそかはかすかにきさてむらさきにしてよ

光明峯寺入道摂政家百首　秋　従二位家隆

篶のゝまねきつゝまねくまねく花すゝき秋風に人のたもとのはた

かゝる人の袖をおもへは

まちわひし秋やこよひとまねくらん花すゝき

家集　同

吉野河一むらすゝきまねくかな人の袖かとみゆる

仁安三年太宰大弐哥合　花　判者俊成

はら姫の袖とそみゆる杉浦山すそのにまねくおはなゝりけり　重信法師

家集　西行法師

見渡せはきかすみすすきかりにきく鹿のなくなる

をちかたにまねく尾花のかたよりに月の出かたの雲

文治二年百首　藤中納言定家

しかの山越えてみれは鶴すめる秋のさかりをしらせけり

巻九 五重出

五行云の十五て西といふ中秋也

都ならぬ野への花すゝきおのかまて〳〵月やとる 同

寶治百首の　大伴宿祢池主

一千九、六帖 毎ともすれと花咲すして枯風よひとまきあつまてあらすまし 廿九

建保三年名所百首　従二位家隆

宮城のゝ花なき風にうちなひく尾花か末に雪そ吹く 本中

百首歌　衣笠内大臣

うちなひく枯野のすゝきさかりなるむらすゝきかれ尾花やとらん

家集にて送師はなれて　前中納言匡房

花すゝき穂さきの露のあはれしを人をまち見るやまと女郎花

家集 枯萩 みやまへの野の篠まつけしもそよふきさゆるくれもなき 同

久安百首　上西門院兵衛

こきまぜて人の折りける花すゝきまねくにまかせ袖のみ

承安五年三月重家歌合　判不知

紀康宗

花すゝきまねきよせたる人の心かけ見るまてしや

同時社頭歌合

尾花さへはらはらとまねきとしもひくらんもたれを小萩

千五百番歌合　後鳥羽院御製

花すゝきひくかたに見る風のするゆふかけもむなしき時雨

百首歌　土御門院御製

すゝきの枯野の風のそよくにも秋の露そむすはれそき 同

ほのきの見えける末の初穂かに見えけるかな 同

稲荷の社歌合　中務卿

建礼門院右京大夫

めくりくる／＼そのかみなからすゝきのみまねく袖にむかしかきくる

秋篠外槙

常盤井入道太政大臣

秋篠のかた山すそれのくれなゐにあらしふくらむをはなすゝきか

千五百番歌合

正三位季能（経）（能 古）

誰かへて野をもわけてか深草の里はたかすむ鶉なく也

百首御歌（兼 思 古）（同）

民部卿為家

こまつむる袖てひく人もなきすゝきとらのやまはへまねくは

古今
水くきの岡のや
かたにいもとあれと
寝ての朝けの霜の
ふりはも

建保三年名所百首

従三位範宗（宗）（宗イ 兼）

むさし野や月影ふかくもえいつる原かたなひくへの露の末道（ありイ）

浪のよる野へはくれなゐのすゝきたのゆふへ吹らむ（同イ）（同イ）（はた）（たイ）（同）

保安三年九月十三日関白家歌合　庭露　判者俊頼基俊

夜も世のまもりはて千草白露のみそちはへてすになみ

同判者俊頼云（判者入判）いてすゝきをなかめのそてにかへさてそ

基俊不答之

ちとせ人

嘉保二年八月廿八日鳥羽殿前栽合

権大納言宗通

あさちふく岡へのすゝき秋風にまねくあやしな花すゝきかな（かは）（のかへ 古今（金））

金葉

百首薄

藤中納言定家

わけし野の風にさそはれてちる露の袖にみたるゝ秋のゆふくれ

正治二年百首

小侍従

ゆふなひく秋の花のけすゝきいつまてかたのかくるらむ

六帖題

衣笠内大臣

詠未上

新三二 在明
あし曳の山もとかすむ秋くれてくまなくひかる有明乃月

新六 同 新六十二　民部卿為家
うちはらふ秋乃さ衣く花すゝきたまの袖さへ露やおくらむ

文永四年毎日一首中　同
詠つゝもきてはらふ野のたまの花すゝきかたのへに人まねくらむ

同八年毎日一首中
秋きぬとのすゝきの穂の出なむ野にまちわひてさしもまねかむ

秋萩乃花野のまつむしの声の草の袂に色なき露のそてゆく

題しらす　よみ人しらす

万十
秋されは野辺のすゝきのゆらくもてわか思ひかくしのはつさむ

秋三の中　修理大夫顕季

明玉
風ふけは花野乃露もちりしくも袖にみたれてみゆる

明玉
山さと風さきふくのかたのなきかたのこゝろしのいさよひの月　正三位家隆

布引百首歌　藤原光親卿

風わたる布引の瀧のしらたまのおつるをきけはわたつみの
仲實卿家詩歌　よみ人しらす
東路の野こえのをみなへし人まねくらむすゝきかな
建保二年内裏歌合　順徳院御製
いとし深の野中のまつの露もちる秋のゆふくれ
六帖題　新六十二　信實卿
いはひ吹しさつまの秋風にまたすゝきの袖こそつらみ　従二位家隆
建保四年百首歌
花すゝきかむかくの秋の夕くれのいかにつゝ秋風そ
新三二 六帖歌　新六十二　衣笠内大臣
秋風にたえぬ花すゝきかむかのおのかぬきにかくれをも

小野社百首　同

秋風にあへず吹よる花すゝきむらむらなびく野への夕暮

秋歌中古来歌合　権中納言経平卿

花すゝきおもしろの糸をも吹く風も玉のをとけく露こぼれて

寄花旅　人丸

ゆきもこは（行）おほはら山の花すゝきまねくも出でゝ忘れつる卿

篤　五十　よみ人しらず

道すがら野辺忘れぬやおほはらの花すゝきかねかね

野篤人家　藤原教朝卿

おほはらの里の夕へもみえて花すゝきすゝみのほやかそこむしろなる

家集　類不知　中納言家持卿

むらはきの一もとすゝき家の代にむさしのまこちおもひつる

天慶八年中宮七十賀御屏風　源信明朝臣

やさつこの花きはの野乃花薄まねきすゝきまねくらむ故

御集　後法性寺入道前関白

風ふくは花すゝきはの野乃花すゝきまねくやおのがよすがなるらむ

永久四年七月忠隆家歌合篤を　意尊法師

風ふきいくらすのとみて薄きなびく野のとこまねく哉

家集篤を　権中納言長方卿

夕暮小野の原篤まとふかの花すゝきやまむ

堀川院御時百首　俊頼卿

花すゝきまねくかの原をとつけくるすゝき人もまねきかぬる

○無名抄に云三種の薄あり…真名…

鴨長明

見とへはくいとまほの花すゝき穂にいてゝけふ人まねくらし
白おほすゝきますほのすゝきとさらし侍りけるにさゝすゝきのますほ
秋すゝき侍りけれはますほのすゝきに人の名にいはれはてたる
さて伊勢物語にきこえて見えたるも見ぬ人にはなかりけり
板屋のかりけれはますほの花にせよと色々の前栽とおほしき
りなるはしとはしくに人のかりとおほしき時節ありて
くかりけるにてありけるまゝにまたあふ人にこれはこれまた
まさなかりせんさいなる花の色々ひとすきてこそあるへて
みつけてそ三種のすゝきと子細を人のかたりしを聞き
にみえけるとそ

建長八年百首歌の中　衣笠内大臣

花すゝきますほの糸をくりかけて玉をもぬける秋のしら露

家集月前薄　西行上人

花すゝき月のひかりにまかはまし ふかきますほの色にそめすは

御集　花山院御製

夜もすから花ところへて思ひやるひく古郷のますほの有らん

百首御歌の秋　順徳院御製

よもすから秋の秋風の吹からにますほの薄乱れてそとふ

保安二年九月内大臣家歌合　野風

花すゝきますほのそてを吹風にまねく草かやさえなからん

藤原為真

秋風のますほの花の穂にいてゝまねくもしるしあはれなるらん
此歌判者俊頼云右歌のますほのすゝきといへるはますほ
まかくみえたるはかの花のまつ見ゆるはすゝきの下句に時
へよませるをこそみちもよくは花の風によれる也

常よりもみるよりも侍るを世の秋の月毛の空をよくみる
おもき筆にえ見つて侍られおかし花ともかかるの
うつしまで常よりもてはかり侍りしとく

建永元年和歌所三首御会ニ羇草花

後鳥羽院御製

横雲のたなびく山のそへ野すゝき老ろく咲あかる

文應元年七社百首 賀茂

民部卿為家 卿

いはしろの岸のつゝみのひくきすゝき袖にまねくつゝみる 同

千首 草花

秋の野の草葉すゑにはまねくとも知らぬ秋の花 同

三十首歌ニ雨後薄

前中納言定家 卿

まねくとて草葉のすゑの白露に乗ぬ里の夕風まよふすゝき 同

浅茅 枯野中

うらかれわたる花すゝきの穂に出し世を風にまかせて 同

石中?? 同 秋上

文永五年九月十三夜詠人々野草露繁

大納言資季 卿

様々人の方にむすふ野への花すゝき露けさまねきて

大炊御門内大臣

花すゝき／＼もことにをく露はうきまねくとも秋の風

久安百首薄

慈鎮和尚

日吉社に和歌

あふれしたれにまねきつゝ人をまねせの風にこたへぬ／＼まねくかな

秋の野に花すゝきまて

光臺院入道二品親王

一むらの萩を宿のしるしにてまねく尾花のゆくへのこさけさ

大治三年八月廣田社歌合 薄

大僧正行尊

うらかれを／＼人の心にいる野まてまねくすゝきかたへのはな

嘉禎三年正月日にて為

民部卿為家に

花すゝきあまたまねけとそらの里といかなれはまねく人

貞應三年百首 述懐

しらの(?)にちらいてし秋の色添れはその家をかくすまかせ

千五百番

霞すみ荒むきの村々の志らぬをやそうらを吹る風

家集 山中秋花 隆祐朝臣

志かるのゝえ山おろし吹かへすたゝ来まて冢の里の波

家集 萩を 定家朝臣

つくはねの峯吹くるに錦風にしはくの野はいち面あかれ

長三の 十九 よと人しれ

はくさねとの野りくみをいおもはらか志つきの野をかりてて

さむくきをまね

刈萱

文治六年五社百首にて刈萱 皇太后宮大夫俊成に

述懐百首

あらさひしけにをやさしの秋風にまつそよきかなる刈萱

文治二年百首にて 前中納言定家に

萩原や志けるまゝしはからかやの色にこぬらすとおもひ

多つねきい庭のかるかやほしまきく人やかはらしあはれてらす

千五百番歌合 嘉陽門院越前

秋風にうらみてぬれくやしきそてのこのそよのかるかや

文永六年毎日百首 民部卿為家に

みそまてまかれなくのかるかやのつまにかゝいをるへ人まこきまねく人

家集 秋の中 西行上人

秋風になひくみやこの刈萱の下葉に露の数まさるらし

家集　信實卿

おきまよふ下葉のそよまとはてゝまくすか原の野への刈萱や

本院左大臣家前栽合に刈萱

藤原成忠

かるかやのみたれていつるねもなくてしく葉にあまる露のよ

同　よる人もなし

しく宿に色かはりゆくかるかやのみたれて秋をふるさとのみそ

百くさのかるかやの縁ときゆるみそら

兼基法師

風ふけはいさ穂に出て刈萱や野への錦のこゝろもみえけれ

家集　前中納言匡房

早文五百首

その山や野風もさむくかるかやのしをるゝ花もみたれあふらし

思刈萱古来詠合　藤原頼家

我人のゆきて乱るゝかるかやや我思ひにもみたれそめけん

題しらす　赤人　よみ人しらす

六帖今本元

秋風にふきみたるらんわくくさのきえてかせひの思ひの刈萱や

萩

家集ひくらしを　元真

秋風の萩の下葉を吹みたるらんひくらしの聲

秋はつる中　法性寺入道前関白

万代

たきの萩に風の吹にまかせてをれし心にみちぬまりけん

冷泉院みこの宮ときゝ人の時百首の歌てまつりける中に

重之

（朱）玉〇四
萩の露に吹秋風をまちまつて恋しき／のくるらむ

嘉元二年百首て萩　前参議為相卿（朱）
秋ちかく来ぬる野への露におきて一つ乱るる風の下萩

文治六年五社百首て　皇太后宮大夫俊成卿
聞しより生田の杜の秋風に萩の葉わけてやみなましかは（朱：に）

文応元年七社百首て萩　民部卿為家卿
江よひまつ月に打すさみて萩吹く風の秋そかなしき

文永十年毎日一首中　同
かきわけし萩の下葉の秋風をさこそはこころにまかせ来て

式部卿親王家三首て秋草　前参議為相卿

見まほしつつゆふつかの白露のちるとてもむすふ野への下萩

住吉社百首て　慈鎮
たきつせのおとはしつまりてゆふすみよしの松の枝に萩のうら風

最勝四天王院名所御障子　同
秋たてる里にみやきのの原露におろす萩のうら風　同

十題百首て草五首の　後京極摂政
あさことに風のままにみたれきて人やはとはぬ小庭のたき原

秋三首中　和泉式部
明玉
萩風の露吹むすふ秋の夜をねさめかちなる床のさひしさ

題不知　読人不知
万三（朱）高市連黒人
ちるをけのまめ〔たきく（朱）〕すすきかるゆくさくさ見るわかかくたきたつ〔すすき（朱）〕

家集住吉歌合十七首　前中納言定家卿（朱）

むさしのゝ露わけ吹風の色してもわれにみえぬあきそみえける　同

文治二年百首
これまてや寄そい袖にやとりけん萩の露おく秋のゆふ風　同

後京極摂政家詩歌合　宮城野萩

秋きぬる萩吹風のをとはしもしらぬをやきみか寄　同

大治三年八月廣田社歌合　萩露

法性寺入道関白家堀河

あさまたき吹まてかゝる露をしほれる萩の葉にをきかへる月かけ

久安五年六月家成卿家歌合

刑部卿頼輔

しのすゝき思ひみたれていとゝしく野辺のたきおちてみえける

家集廓之

権中納言長方卿

ふかしらの露のおもかけしれなからそれそのえたる萩の下紐

永久二年大神宮禰宜歌合　萩

よみ人しらす

秋きぬといふをもいはねとしらせにや萩のえたよくしなふる哉

同
なにはえのよしのへの秋風にまねきかへるゝかたの萩のはな

天承元年八月頼家朝臣歌合

をきのはのそよふく風のはなのえたにそ

長承三年六月常盤井五番歌合　野草

藤原範綱

いまそしるをさのみゆるかり人のかさなたいくなく萩原

寶治元年百首　萩風

正三位知家卿

夕暮の風よりさきに萩の露のちりそめてけるかな

六帖題

信實朝臣

新古今二
吹みたる風をそしらく萩のへや露こそすれ袖のなみたは

建保三年内大臣家百首 夕萩（光明峯寺入道摂政家百首に夕萩 新勅）

従二位家隆

秋ちかき山の小萩ハ色みえて夕くれしるく秋風そふく

光台院入道二品親王家五十首 萩風

草も木もなひくとみえし山風にひとり志られぬ萩の下露 同

寶治二年百首 萩風 後九條内大臣

はやくれぬ秋の日かけき山里にをきゐる萩の末葉すゝしかるらし

千五百番歌合 参議雅経

今ハ又萩乃末葉をそよかせてみたれぬ露をすむ宿かな

同

おきくらや木の下露ハ吹かせに秋そまされる萩の下葉

建保三年名所百首 藤原康光

秋きりや末もさためすよそにのみかすみてゆく玉河乃里

正治二年百首 源師光

むら雲のたえまの月に雁なきて秋萩の葉そよく有明の空

後九條内大臣家三十首 月前萩

秋萩の葉にかせて川風の秋のけしきハ月のおもてに

前中納言定家

同

萩乃露をもとめて月も白露にうつるかなきの秋の月

従二位家隆

文治六年女御入内屏風

皇太后宮大夫俊成

風をまつ萩のはかなき露のみやよそめに秋を宿すらん

家集 萩風

従二位家隆

吹くたひに花ももろくひるかへり風にしきの萩に秋風そふく

郁芳門院後番歌合　権中納言家通卿

をきの葉に風のふきしくゆふくれはさらてもつゆのおきそまされる

萩をよめる哥中に　皇太后宮大夫俊成

わか袖をおきむすひつゝみるほとは花もやさしくみゆるなりけり

題不知哥花中　恵慶法師

さをしかのすきまもなくてきゝしより萩のうへにそ秋はきにける

同　万十　よみ人しらし

おもひつゝまた秋萩の下葉さへやきそめ秋風の吹くなる時に雁なきわたる

弘長元年百首　萩　従二位行家卿

さをしかのたちならしける萩のはなちらまくをしき和歌の浦風

建長七年顕朝卿家続千首　海邊萩　光俊朝臣

いとゝ露おきそふかもわか身さへこそ萩の下風

家集　左兵衛督教定

露おけは野原の萩の花のえたしらぬ風にもちりそはしまる

同　野風　隆祐朝臣

末さへや野原の萩のちるらんとしらぬ野風にちる萩のうへ

菊

大嘗会悠紀方屏風　前中納言匡房卿

かはつのやわか家のかすをかそへつゝ千世の秋まて白菊のうへ見え

堀河院御時百首　権中納言師時卿

秋ことにしきてみえしとちるこゝろきぬのさをかちよのまかきのしらん

天徳二年八月右大臣家にて秋花露を思てよめる　よみ人しらす

元輔

流布本元

かつちりてかつさく花のにほひかなはるのやまかぜよくとふけゆく

白河院御時百首に　俊頼朝臣

はなはちるさくらはさかりにみなあをきちりにたちてきて

同　大皇太后宮　肥後

龍田山たかきこずゑにかゝれるはあまたのはなのさけるなりけり

天永二年七月内大臣家詩合　草花　藤原宗国

女郎花ならぶ野辺のさくらよりあだなる人の心をぞしる

家集蘭を　源有仲

きてみればいたはりの山のあさつゆにしほれてたてるふぢばかまかな

同　元真

むらさきの草のゆかりはちなる波のはなにぞありける

長寛二年白河三位家草花　登蓮法師

ちなる波をおもひやればこのはなのみやこにもちらずやあるらん

判者俊成卿云すゑのよにはこのはなをとりてこそあはれなることなれ、ちなみに判文云妾燕姫夢蘭をえたりしまことの直幹詩にも夢断燕姫暁枕薫とかけるにやはべらんと

左傳
鄭文公妾燕姞夢得蘭生子則名蘭穆公是也
朗詠　直幹
夢断燕姞暁枕薫

千五百番歌合　野宮左大臣

あちなる波はめちにさしてかくしのぶなるをもとめつるかも

判者云鄭文公之家にやしき妾あり

名は甚右衛門英姫といふ夏に天使きたりて蘭
をわすらへくもなく花を添子と世をなしたりし夢さ
めて後こそ蘭のにほひたる後と名付くといへり
汁事とよまの積まにしるしとて　顕昭判之

文治六年五社百首　皇太后宮大夫俊成

あらたる後蘭のまくらはむかしよりは夏の香もやそてになりなむ

ゆふ露のたまふさ袖の香はむらさきの花むらさきの色もみなかな

夜もすがら後にほひすてゝ家にかへるをすきまもりさくや蘭

○良経文集ニモ
蘭省花時錦帳下
廬山夜雨草庵中

文應元年七社百首　民部卿為家

かこちつきむらさきの花藤袴夢のゆかりは露そてにさは

[文治三年]
大治三年八月廣田社歌合　蘭恵

源仲房

あふことはかたみの野へのあちたる後をたまさかにみえよとそ袖にかくる

長治元年五月季廣朝臣歌合

大江盛伯

みやきのゝやたつの原の春もしきて藤袴もむらさきにそめて

天仁三年十二月顕季家歌合　蘭

橘能元

ふちもとの後に濃きむらさきの花のさしてをとゝへしよはきすゝき

百首歌

藤袴人おもひかさねとるかもとなたちのはなのわきた

慈鎮和尚

文集百首　前朝使有書　濃物花蘭裏三叢

作蘭

同

秋の露はうつろひやすきむらさきの後きてみえる人もかなしく

家集蘭を　六条院宣旨

あきの夜かこころひあゆやたつらひあ秋のことにおきすてゝろ

老菊衰蘭多三径　前中納言定家

霜枯はあらしはくくむしされはこゝろもきくのいろやかはるらん

○朗詠　菅三品
蘭蕙苑嵐摧紫後
蓬莱洞中照霜中
暮秋に至りて[illegible]
蘭蕙に嵐も吹[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

家集　権大納言為家

上文常、雨り上人

あき萩かしろひらろのへにまろねせしよせらうるつらく

為世

貞永三年百首蘭菫枕　民部卿為氏

たちまちのいろいろかちかき夜たかたまくらにかほるらん

千五百番歌合　西園寺入道前太政大臣

○別本无

あれ猶とさそはいてそれとのめらちかき夜あかあかかゝるまくらかな袖

三百首御歌　中務のみこ　鎮全

あはれさも我身ひとつにきかなくはわかちかた夜たゝねさめしてかたみなるらん

草香

永久四年百首草香　藤原忠房

春よりはいつえ心でしらぬ草のかも青い杜風にかほるなりけり

同　源兼昌

秋の野の花よりけれはくさくのかをうつりぬらん我衣手に

同　二条大皇太后宮肥後

我袖は草のかうつる秋の野にさひしき床なるあつきぬる

同　六条院大進

夜もすから野にかりあかりいれえいつくくさかほるらんをきる

家集草のうへ　元真
しら露のいろにそむとは草のかもなくさくにとにあきのまよふらん

秋花
建長五年毎日一首中　民部卿為家
又たくひ秋風さむく吹にけり野辺の千種の花のうへ
秋風のたまくたくみゆる庭のこ萩か花のかきは

文永元年毎日一首中
白露せよもちくさの花にあらしのおとさえになを思ふまをまたく

並一字三十一首　前中納言定家卿
さらにまたたくひ世の夕風を一花の秋のあはれそこ

建長八年百首歌合　従一位良教卿
秋の野の花のさかりは色そへてくさむらかせにかはらまし

建久元年和哥所三首哥合野草花　正三位季経卿
あさ露のたまくく葛は風もそてふきみえあさ風のをちこち

正治二年百首　小侍従
いときなき野辺もみとりの衣手を花にあつめは秋のゆふくれ

同　前大納言隆房卿
宮川野をはあすみとりにおもしろき秋はきりつつ萩に花

詠秋野花　山上憶良
秋の野にさきたる花をゆひをりてかきかそふれは七草の花

同　読人不知
秋と見えぬ萩かはなにもひくはるの秋風さきてはなもなつ

承安三年法輪寺哥合草花
　　實顕法師
いつくの花はたまてみちと池をいくのつに目もとまる
建保三年内裏十五首哥合秋花
　　前中納言定家
桜衣いもとくおのいろくまさきをさへおきつわか露
六帖題　　信実朝臣
野色をはまはへ花のはきはるそてにまへるまはまる
同　　正三位知家
やらくさにはをとめてゆくさとのたかうへきし秋の花をも
浄集　　慈鎮和尚
むかし人のあとさへやあらんよそにしの秋の中
隠庭恵布允範二三九首之鶏冠草　花乃色二拾月八日
題不知　　詠人不知
かくれなきおもひくもともみなちかの花のはきはなし
家集　　能宣朝臣
秋の花さはなくそしろたつ雉いろのあひといそかしも
すきたつるいてまはあひと顕まてよめるとそ
家集　　俊頼朝臣
山さといやすさかけなきさをやすみなこそなきて
法性寺入道関白百首草花

後京極摂政

荻ちるやすこし風のおとにけさよりもまたひとはを
しけき野とゆふ庭のやとにかへりて秋をそへて虫のなく

家集秋哥中　従二位家隆

すきのやあるゝまくらくし荻かもとにまつはまも秋ならん
はなちるさきさへかけろま風のふけはつゆとそよわる

俊頼朝臣

いつもかはわさにちるらん秋風のたちさき野への露草の花

題不知　西行上人

うつりゆくともいさしらぬその名のおきさかされくる露草の花

寛喜元年女御入内屏風　野花盛開

常盤井入道太政大臣

人尋こ
萩か野やゆかれぬ草のしけまくて花さく秋をよそにこそみる

堀河院御時百首　隆源法師

ともかくも人はいかにその野へにてちくさの花をひとりそみる

仁安二年八月経盛卿家哥合

登蓮法師

秋の野の花はのこそめしらいくさやあまたおもはれこそ思ふ
哥判者清輔云ふくさやこの日本紀に
侍ことそや此歌はいかさまにもみえしいさゝかのみ
ことのほかにかはりて先国古をきてまゐらすへしと次
猪国山河海をうつし草木をそうしてまの中や
もちつくさのをやるやのひとつ歌の心またなかくれ
くさやひめとりしきのまほはしかる事只

訖竟宴哥　まもりしこの春やもろしの色のひ
めとこそよめたくしものとやしらにこそこ
あわりてしそよまほさみんとそし

槿花

堀河院御時百首　中納言国信

山さとはあさとのひまはれわたるみわけてそこつむあさかほの花

同　隆源法師

あさかほのえなき花をいかにしてかつこき人のたのまるゝらん

同　修理大夫顕季

浦風はなみよせやまかくれふきすらむしのあさかほの花

文治六年五社百首　槿花　皇太后宮大夫俊成

あさかほの露もやちよの菊よりもさき山ちの菊よりも色深きと

百首哥　土御門院御製

冬久しわか行の程のはかなさはあさかほの花もわかれをしまん

久安百首　右常哥

秋見のくれをまくわすれしとわかの枝まてみえむ　清輔朝臣

百首哥　右大臣家哥合　僧都隆心

槿のあさにいのちなきあはれをいつはとめてのこそもらしさまたん

建保四年百首哥　光明峯寺入道摂政

立まさるしきりのまつきにいもしすわのさまさらさかあさかほの花

正安三年権中納言兼季

文集十五　松樹千年終是朽　槿花一日自爲榮　於柴云時詩之第三第四句見之に非す　衣裳のあはれなりて槿花に　すみ二月十五日没上に　見る依之是栄　新古今集

入道前太政大臣
我宿のむかしの秋もそめてなりこひ花さくあさかほの花

家集　民部卿為定
あくる夜のそらのきくの露もしあまはさきてきあさかほの花

百首哥　従二位家隆
かきねよりおもけしおくるもいのちこそ　かはしはあさかほもも

百首哥槿花　寂蓮法師
よのなかのつゆのこゑめ日けまつうすく　はあさかほもも

建長八年百首哥合　右近中将経家
きえしまつはきへ待とそこそ日まかぬ花の槿の花

同　前大納言顕朝

同　前大納言顕朝
あさかほの花まちえてもいくはかりのとけき程もなき
けふ判者右哥の槿花一日自成栄
白居易か詩よりいてたるなり

三　山井　読人不知
山の井のそこにあさかほのかけをみてあまたにうつるはなをみる

三　あさかほ　躬恒
春日野の野への鶯の声になき　つつ（いつも）

六二　題不知　深養父
ひともしくもあれなとあさかほの花

明玉　をしむ　小野小町
をとけなき物くれなきたるにやせてそかはきさらけむ

同　　　　　　　　読人しらず

秋くれはあさかの花の音よりもかたまして云ふ

秋野

久安百首　　　　　皇太后宮大夫俊成

なまめきて立てるすかたを秋のゝの花の姿のいろにかふらくも

三十六人歌合　　　隆信朝臣

うちなひきこゝろにかゝるのへのつゆをきてかへる袖のかゝりき

読人不知

雁かねの聞えし(?)風にいまよりたまのつゆのおくらむ

同　長哥　　　　　葛井連子老

天地等 万葉

あきはきをちらへるのへのはつを花かりほにふきて

安伎波疑乎 知良敝流野邊乃 波都乎花 可里保尓布伎弖

くもはなれとほきくにへのつゆしものさむき山へにやとりせるらん

久毛波奈禮 等保伎久尓敝能 都由之毛能 佐武伎山邊尓 夜杼里世流良牟

建保三年名所百首　　順徳院御製

かり人のをさゝまよけわかりしまへも秋のさかのゝまのよそ

嘉元三年百首　　　為實卿

あくれなき野原を人はわけてこそ秋のちくさをたれかとひみらん

六帖題　　　　　　光俊朝臣

野人のゆきてみまほしともかくす花にいきをなり

後京極摂政

しらの山ふもとの野への秋の色はわけこしやとを人まつのまけゝれ

〇四百九十三首　計二百五十一首
長歌二首

庭のま垣の小野へのむしの聲を　同
月も風とのさしそふ哉

夫木和歌抄巻第十二

秋部三

題

鹿　雁　秋田

稲妻　稲負鳥

鹿

題不知　　嵯峨天皇御製　新　山刊

万八　夕されはをくらの山になく鹿のこよひはなかすいねにけらしも

同　　坂上郎女

万八　よなはりのゐかひの山にふす鹿の妻よふこゑをきくかともしさ

同　　中納言家持

万廿　をみなへし秋はきしのきさをしかの露わけなかんたかまとのに　萩しのきこ

万八　このころのあさけにきけはあしひきの山をとよまし鹿なくも

同　　人丸

万十　さをしかのこゝろあひおもふ秋はきのしくれのふるにちらまくをしも

同　　よみ人しらす

万廿　山のへにいゆくさつをはおほかれと山にも野にもさをしかなくも

同
秋はきぬいしもえたつとけはまなはなこなく山したかはかけの　色
百五十五
さ琥しかはかりも萬むらみくすものかなるよふく　元元
百五十六
かりいきなれ萩ちる秋のさ琥しかのなくれなとおもらぬきは　行
同
おりたちの山のとけよなくしかれかきつつやも山のはこ
家持
ころもはたそ秋てきものきなく鹿もしれはにかかる我のたゝらし
百五十二
たつやまはおちゆくもみちは神なりしとてすならむ
題しらす　人丸
家集　もしきのむてよもてゆく書けるおし中　元輔
よろ代をかけていのちもさかかれそえの山よむのさゆら
百首歌　寂蓮法師
もみちのそとえの山よおとせは妻よこふも　しかなけきかそ

冬歌中　参議雅経
山の葉かくわしそいまはとそ山みよさらなるもみちの錦かし
貫之家歌合　読人不知
見るわすれくりこ深山のもみちはよるの錦なりけり
文治六年女御入内屏風　後法性寺入道関白
祢きことは神やうけひくかすか山あきのもくれはさ琥のみゆる
同　後京極摂政
春日山松のおもしよ秋をへてもみちいろもの杉とはくさ
天徳三年八月女房前栽合歌　もみちの山もみち葉
流れかけよ鹿なく　元真
もみちはむすみちのかけよなくもみちはいぬくすゆよけける

堀川院御時百首歌

ますらをにみちやまとられきゞすのはまよふのをちこちくも
権大納言公実

同
あさ緑あさるきゞすのこゑさへもしのゝめのもえ林花さきぬる
大納言師頼

同
かこ山のそはのかすかにつとけてかさねてこゝろの妻をこふなる
中納言国信

同
よもすがらきゞすの山はすみてつまこひのきゞすのこゑ
修理大夫顕季

同
あはれみてなくなる山のかりはにはまよひけすきゞす人
権中納言師時

同
後頼朝臣

きゞすなくあさりのきぎすの山はまださむきそらのあらしにつまをこふらん
久安百首
実清朝臣

さをしかの妻にこひやあはさらん人のかりおのひゞきのはらく
天治元年五社百首歌

たかまどのきゞすはたえまやこゝろのあるのかりおのすそのゝ
皇太后宮大夫俊成
承安三年七月大宰大弐重家歌合

はれまゆくとまのあけぼのゝはかみゆるかひのゝ山の嵐の鳴
三位季経
建長二年八月鳥羽殿御会当座二首御歌
夜暁嵐
後嵯峨院御製

まだくらきたのむのはらはまだしらぬゆふつけの山はなほくらきに

後二位行家卿

家集山

みてもせめはれまの風にかやまさもかけの山に庵のまつ人

三条入道内大臣

庵

雲もすむ月のひかりのまろ山まくらにしはし庵をならく

光臺院入道二品親王家五十首續歌庵

西園寺入道太政大臣

おのつからはまつかせさくみゆるかきりとやまの山まくらの庵

如願法師

家集庵を

かき陰山の山人絹のあさたちよ風みたしたちのすそ打すさふ

神祇伯顕仲

門跡社哥合暁庵

夜も更ぬ山の奥にしるしめのうさひしきはあり月の庵

為忠朝臣三河国名所歌合萩山

藤原道経

いろくなりきえて見れは萩の山まろし庵や秋はしらん

保延元年八月家成卿歌合

高松院右衛門佐

あたにとのめをもみえていろやまはむらのかけをもしらすらん

光臺院入道二品親王家五十首續歌庵

前中納言定家

松山にのりてよかけの月なをはむかしのこのしたちり庵やまもらん

後久我太政大臣

寂蓮勝四天王院名所障子

たつね山の峯まてあるしきそはれしはたちり小庵いかにまつ

慈鎮和尚

四季百首歌合

秋乃夕まつの風のをといさゝて山神よもしろき袖ゝの
袖ゝのさら田の山乃おろしやたちのみさのへきたらん

百首御歌　　同

たつた山みねのもみちはちりそめておしかのこゑも嶺のあらし

御集歌　　中務のみこ

さゝやまのみたれはおなく鹿のねもきこえて秋風そふく

仁安二年八月経盛卿家歌合　鹿

源有房朝臣

はましもの秋のよしなきさよもすからこのまの山をそてらす

保延元年八月尚書歌合　鹿

中納言長成

おしかなくいなはの風にさそはれてよしのゝ山のおくのさとまて

此哥判者基俊云其姿妖艶不異荊臺之夢之人姿就中これなのこゝ山よいかすなるんなと心詞こそまたくきてまてきゝなれるにし侍と云

武将中　　　中納言定家

ゆめくるきちゝのおもの山の月すむみなとの月にさそはれて

家集たかきこと云　山田の方にて鹿なくを

よきて　　　後朝郷

さよふけて山田のひたのおときけはあはれもたちそふ鹿の声かな

鹿のなく音にきこえしけさはいかにもをくのはしいせす

あはれなるかなしとおもひはすゝし

狩野下まて九月十三夜

いつもせんこらひの月は月はあきの鹿のなくこそ

曾丹集九月
そゝたかくをかの鹿
鳴よりなげかく
よそにあきけなり

寛平皇太后宮歌合　同イ

あきらけきはてぬる秋の山よりもちかき都をあけてなかめはそなき

保延元年八月家成卿家歌合鹿

為忠朝臣

あらしきくにつまやこもれるさをしかのそのこゑすくなくおもふ　絶せね

桃園社三百六十首　前参議雅有

そのこゑはありとはみゆるもちのきくかなほにほはぬ鹿やなくらん

清輔朝臣家歌合

登蓮法師

さをしかはしとさきさくらかりみてしかのやなきかさやまをかけてやまなきそ

経信卿家歌合

読人不知

うちつけにむつましからぬよのなかにせのいはとをうてて鹿をなくらん

家集

源雅光朝臣

いそのかみふるきみやこのたちのへをかきりてなくやまと鹿かれ

建長八年百首歌合

清定

きちかくてふみちかきさかきのやまのいはねのさかもか鹿なくなる

宝治二年百首

衣笠内大臣

秋風はるかなるみちのなかにそふくいなそよくなかにそや鹿のなくらん

家集

後頼朝臣

そのかみやまよのまなふきのきてきさをさへみすと

あきのよはやまちもかよふさをしかのはきのもとのおのへ神なる

陽成院御時

世の中はさすかにあしとおもふなよしとしてもいさ鹿のなきかなとらん

家集歌　源仲正

さびしさはいつもなれにしまつのかけさへやさしきをかみえすまそよ　よしなし

詠歌大概　読人不知

百十　山里はいさ川そのおもひたえつゝとまりなくなり流れまぬかな　かり

新古今百首　前大納言隆季

おしなへてやまのはいつもしらくもにわかるゝ麻のかたみとなれ

円　待賢門院安藝

きそみちのいさゝめかさならにけつもゝおくれもつまるまつまる

円　花園左大臣小大進

あしひきの山をこなくあきれぬとすきいへとふれにもせむしらなくさ

円　待賢門院堀河

さとはなにをかひしき山里のかすかなりさへかなたくなり

文治六年五社百首　皇太后宮大夫俊成

あらしふき峰の木の葉にさそはれてさびしからぬは秋の山里

二条百首後京極摂政

わか宿にくるしまつけてきこゆなりかくのはつかのあさの

霧わかき峰のきのまよりおきて宿もみさえしこゝの

家集　元真

うちはふる山すみのけのよし人くもきみなと俳をはぬ

或日はよりをやちとて　恵慶法師

くりぬ山秋の川麻のかりもにつけきめせもなつけさる

家集　円

としのはもよさつもの都きてもまてたまてもなって神なる

寛喜元年女御入内屏風　小野麻呂をりかお

是より世の歌あまりなり

同し　　　　　　　　　　　　　　従二位家隆

もみちそめの山のくれ井まかりたるさ夜の月のかけ

家集秋歌中

ひく海のはにやす森の原ゆりみされはすくやその秋のはつ露

御集秋田鹿　　　　　　　　　後九条内大臣

あはことをいてその実ときりなるねとひまてや鹿のなくらん

永久四年百首秋山　　六条院大進

その山はあさふ鹿もおふさてく秋のもみれはきものいさりなり

人をみてそとのはまかりけるは鹿のなくなれは

　　　　西行上人

せの林をききてはつきてゆくすむ人乃里を隔てその山さと

堀河院時百首　　　　中納言国信

をはまちとこの山さとのほそりを林をまくら都そさきゆか

崇徳院御時法花経御会鹿都何方

なくもこハあまやの麓のここの山さひあまくにもとも露なり

　　　　　　　　皇太后宮大夫俊成

文治六年五社百首　同

新古今

秋の野乃萩の色けさはとまぬ鹿の声くも人の色の涙なる

峯の松の神こそぬるき十五夜の松のしたにや鹿の鳴らん

為忠百首　　　　　従二位家隆

松乃みねはまるみむしやくらも山人すみの松山すてかなく声

建仁元年五十首歌合

　　　　　　　寿陽門院越前

よさむともはきさ林の麓も鹿の林はゆるけき神の嶺の露

家集夜浦聞鹿　　前太政大臣[illegible]

やよいかに[illegible]の松の風[illegible]鹿のねすなり

三十首歌海邊鹿　　前中納言定家

秋乃鹿の[illegible]

同　　隆祐朝臣

うら風さえて[illegible]鹿のねも[illegible]なくなり

建長三年毎日一首中

民部卿為家

こゑひとつ[illegible]鹿の[illegible]

家集鹿を　　長家

[illegible]

権大納言長家

[illegible]

高砂乃をのへ乃鹿を[illegible]

永久四年七月雲居寺歌合

瞻西上人

[illegible]高砂の[illegible]秋のよな[illegible]

最勝四天王院名所御障子歌

従二位家隆

高砂のをのへの鹿の[illegible]浦こく舟[illegible]

同

参議雅経

秋風の[illegible]高砂のをのへの鹿に[illegible]

仁安二年[illegible]歌合　鹿　判者俊成

覚綱法師

いくよ[illegible]

同　尊玄法師

夜もすから月は波まにさえ〳〵て入江にちかくしかなくなり

同　勝覚法師

こゑたてゝあらし吹なる夕暮に鹿はをのかまゝにつまやこふらん

和哥所影供哥合海邊鹿

如願法師

夕暮は尾上の湊とこそきけ鹿の聲のなかにも更

海邊鹿といふ所をよませ給ける

後鳥羽院御製

淡路潟よせくるなみに比船と鹿のねちかくおくる山風

元應元年七社百首

民部卿爲藤

あはちの浦ふきおくる夕暮に鹿のねさそふ沖津潮風

同

夜さむなるいすゝの浦の秋風に都をこひて鹿のなくらん

同

秋風にたえぬはいひきくそき秋のゆふくれ山に鹿のねのある

ひとの山へのかりく　尊道法親王

はるしけ家十首中

鹿の祢をくるゝおく山風にいまそまさるや志のゝ里人　慈鎮和尚

同　寂蓮法師

志かなれと稲葉の風につけてそよそくみそらたちさく人

五十首哥の秋十五首中

元輔
松の野萩の
りをこ枝に
鹿の声かからふ…か

雲葉

従二位家隆卿

色かはるみかの山松しま麻のねのすそ秋乃さかみ

千五百番歌合判詞

後鳥羽院御製

志かのうらやきつゝかよふ山風にさひしくたゝる麻の初秋

十禅師社百首寺塩麻

隆祐朝臣

けめりわゝ河杜とふ麻の人めさへ谷乃志た風

舟中問麻とゝ書き

浄恩法師

明玉

そよるや三つの浦江に舟よせてはせ時の麻の都なきけれ

百首歌

左近衛大将公衡

淀河うきねの床にことひとも秋をつけの麻に鳴なる

後九条内大臣家百首

業清朝臣

みなせ川山のきりまよりまく麻の都すゝしくもはるかにさえ

喜多院入道二品親王家五十首

源師光

月影そゝく宮もやおなし法とつる麻の都みさをてん

保延元年八月家成卿歌合麻

仁安紀卅八年

源忠季

との向ふ宮そゝく暮やみのはつ秋心かけて麻のみさくれ

この哥判者神祇伯顕仲王右方負とて家
へりし和歌はた後守野の萩のいと萩なき路
のなりゆくなみ時の〳〵けりていへかりさかと
せまをまされていふいかなけれとなんとてる
くはせてもあらりこて浅き事をいひ給へ
るとそ

原上萩といふ事を
俊頼朝臣

秋くれはおもひみたるゝのいとも咲あはせ
萩のえたにしたりなみくみかくれは
よみ人しらす

雑野　六二
おもふなといふひとのまちかぬ萩はかりの〳〵なにてありしと宿

長治二年三月に
前大納言隆季卿
あらくいさまゆへの萩こそまはゆくなくそなくなり

保延元年八月家成卿家歌合　萩
藤原為真
よそへはみなつへるみ野まくつさのいつるをなひきも所あらん

天養元年八月頼家卿家越中国名所歌合三首
よみ人しらす
都きてねよひしあわさにて萩のさきもしきも萩をなおき

頼政　同
山しなの山の尾ふみ萩のあさつゆの〳〵はしりぬ
秋の部　源雅兼卿

良玉
にくるあしみはへまさつ萩のはにはなくなく萩をかやらん

家集深山鹿　清輔朝臣

いつまてかいはほの山にすまひして又なきねをもきゝてすくさん人

弘長元年中務卿親王家百首

権僧正公朝〔加古〕

萩さきて色なる野への鹿のねにみつゝも袖のぬれし玉川

同家歌合鹿　同

春日野のとふひかくれに秋萩の花ちりみたし鹿そなくなり

文應元年七社百首　民部卿為家〔人〕

かすか山ひのへのしかも〔なく〕〳〵よそにたちかへるらん

正治二年百首〔列先〕　喜多院入道二品親王

さやけしな鹿よひとへに草かくれ月をかこくさよの草かけ

安元二年歌合鹿　判者俊成にて

もろこゑやすゝきをわけし柏杜のもりさひしさをしかなくなり　智海法師〔かけつ判〕

暁鹿をよめる　西行上人

夜をのこす寝覚に聞そあはれなる夢野の鹿もかくやなきけん

家集白河にて鹿をきゝて〔白河殿〕

實方朝臣

うき世をは出て山のおくにてもきく鹿のねさへうらやましけれ

〔新六雑上〕

家集秋の中〔中〕　中務

人しれぬなきのねさへ秋ことにいつまてをしか神もしるらん

家集　稲おほせとりまへくさり鹿のねをきゝ

和泉式部

おしなへてまろくねてこそいとゝしくきゝし山のかひと思ふ夜〔け欲〕

家集秋思歌　従二位家隆

稲荷山杉のいかりは明かなるにこゝろからにや今宵さへ哉

秋六帖中原歌　同

そかの山小松か原にうなく鹿まてもなほらのおもひやすらん

大治二年八月広田社行晩歌　源仲正

雲かゝる秋の山のあけくれはつきとさせねと[illegible]

家集歌合中　増基法師

秋の山松のこすゑに吹風の身にしむ時に雁もなくなり

名所六帖中歌松山秋　前参議為相

いこま山[illegible]かけて[illegible]

同　従三位為實

女郎花[illegible]秋風

同　藤原為顕

里とほきたかのこの都こ山の秋の夕暮

布引百首歌　従三位親定

吹わたるさとかや布引の滝とみるまで秋の月影

家集　刑部卿範兼

[illegible]

同　平政村朝臣

秋くれは志賀の山ちの[illegible]人まちこそや[illegible]

千五百番歌合　[illegible]

[illegible]

建保四年内大臣家名所百首秋歌

をはせ山いつきもしほるゝ鹿のつまもかくされぬる月影

従二位家隆 ん

文永七年十首歌 遠鹿

中務卿親王

鹿のねそゆふひのかけはかりなきわたるあらし吹しくたつたの山

建保三年名所百首

正三位知家 ん

続千載秋上

をはせ山木の葉色こく秋風にまつねにたてゝさをしかの声

同

兵衛内侍

色かへぬときはの杉のあけくれにねをたてゝなくさをしかの声

同

藤原康光

鹿のねもいくとせきえぬ杉の露のみふかきかせのやとりて

従三位行能 ん

秋さそふとやまのすきの山風にさそはれつゝや鹿のなくらん

同

従三位範宗 宗匠 ん

よさむなる秋のさひしき杉のいほに山した風のふくとおとろく

暁はまさりて鹿を聞て 夫木抄

藤原基綱

夫木抄

そよくこの山もとの杉のいほにいかにあかしつ秋のよすから

建長六年亀山殿五十首の 野鹿

西園寺入道前摂政

いりひのさしもきえぬ跡をたつねてさをしかのなくは鹿そなくなる

元久元年詩歌合 山路秋行

後鳥羽院御製

さきの山秋をしのゝめゆくかひのやまのいろにもちるやあるらん

嘉元三年百首の歌　龜山院御製

はつせへ井る山いりあひの宿とわくもあらぬさくらの色

文永七年七月白河殿七百首の歌　後嵯峨院御製

あし山かはしまつほとに夕けふりたつあたりのむらの秋

柿本影供百首　従二位行家

夜さむみあるひのへにおくしもにかれ行みちの草の葉

弘長元年百首の歌　後九條内大臣

しら露やおもきをあきのねさめにはつゆきさやかなる

建長三年七月右大臣家詩合歌　清輔朝臣

ゆくすゑきりぬのいろあけぼのゝはすのゆくへもみえぬやまの

保延元年八月家成家歌合歌　神祇伯顕仲

みつまするおもひのけふをむかしより神やしるらむ

はつ判にて神祇伯顕仲かたおもひのさけきて

ゆくすゑはおもひいりぬるこの山のつかさ

かりそめのすゑをゆかりのみちをおもひきて

ゆくすゑはこのかりそめのみちのへに

かりそめにきてもすへての事はくりこ夜山のあけぼの

とふへきはきてそめつらん

御集寄中歌　後京極摂政

秋もちかき山の尾野にて夕ぐれの風の時にすすき

百首中　光明峯寺入道摂政

たつたかはわたりしにや紅葉の色のさかりのゆく

建保三年内大臣家百首　原麻

三ちのくそのめやこしのそてむしやこさかなきさゝしかなし
前中納言定家

同
夏かりの麻きらひの林にさきはひしきはつの露
大蔵卿有家

同
里わかく佐の麻もおりしみつきの原にたつやかくれ
慈鎮和尚

すみかの麻きつのふる林さけい麻のねきかれもこの山風
同

あさふのかいのあれしとなきわりしけへのきわしの露
同

文永二年七月白河殿七百首　秋麻

こき木ひく泉の松にかくしけれやむ時もなくつきや恋すらん
右近中将具氏

延喜十二年九月陽成院亭今惜秋歌
よみ人しらす

ゆふかひの枯はたてかくかひもの枯もあはぬこころの歌
家集　ゆふかひ山の松かけりて

わきもこかねゆふかひ山のまさ木のかくれのなくまつも神をいのれ
増基法師

建保三年内裏十五首歌合　秋麻

こむろ山下草のけくさてかりのむかしたけき暁乃露
順徳院御製

同
思ひかねむかしつる中やゆふかひの山のこむろの山の麻のあさつゆ
従二位家隆

同
大納言通具

むかしみしこゝろのひかりや秋くれは雲井にすみてそれとしらるゝなり

中務卿親王家五十首哥合

前右兵衛督教定

三わの山杉のはも秋のしるしとてもれくる月やさやけかるらん

三十六人哥合

覚盛法師

三輪の山すきのおほはゝときはにて秋のしるしに風そふくなる

家集曉風と云事を

源有仲

さひしさや杉まに霜をくあか月の三わの山の峯にのこれる

顕仲卿十五番住吉社哥合 風曉

源親房

杉の露のをきけんときけはさえ山はあらしもしけてならしのなり

和哥所三首哥合夕風

人ことに秋はみなとの山風にとしもくれぬと風やふくらん

後京極摂政家哥合

大納言通具卿

おのつからやまひしきみの山のおくにまたそれなくらん

慈鎮和尚

六百番哥合

正三位季経卿

白雪をこそ三わ山の風の杉むらによもの神かきかはらん

久安百首

大炊御門右大臣

三わの山ひとりかしこのさとまてはのさひしくも杉まおほえん

文治六年女御入内屏風

正三位季経卿

三わの山杉のそれてまつかひのみゝかはしとのへのとよかれなり

最勝四天王院名所御障子

藤中納言定家卿

ゆふみ山つまよふしかの涙をやかりのいほの萩の上の露

同　如願法師

そよくとこ村月まち夜さむにてひとりかすを秋の山風

同　後久我太政大臣

ひとよねしゆめはこのさとひとをまつ宮城野の（同イ）さかりの（同イ）小萩か露にすきる袖（くれの）

同　如願法師

あきの夜はいなはの山のまつ風のさとにとしふる庭や荒る（くるゝ）

建仁元年五十首歌合　後二條家隆卿（イ）

里はあれてあさちふかくなりゆくすゑやふりにしのちの秋の夕暮

建暦二年内裏詩歌合　水郷秋望

後久我太政大臣

（新千秋上）みなせ山ゆふへのかけや秋ゆく麻のそよくかせの袂（なくイ）

最勝四天王院名所御障子

慈鎮（和尚）

見るせ川木の葉さやけき松風にあさの音もなみにうつろふ（菊のした水）

（続千元）秋の夜のふくるまゝにやまもれは麻のころものねむくなるらむ

ちのゝ社詩合　少将内侍

うくひやかゝるまし里はあはれしらしいはひとつもにかへる麻のゆふ

建長二年仙洞詩（侍）歌合　山中秋興

土御門院小宰相

ひとりゆく入さの山の夕暮はふりかくれゆくや麻のさかる

仁安三年奈良詣人歌判者俊成にて
朗之法師
あつまちのさやの山にこそおもひこしやまやこえすやうらん
秋夜中山　法印實任
きりこめてなかなかにこそ見えてこせのさやの中山てらすなり
建長八年百首歌合　光俊朝臣
あふさかやこえしひとのこころにかけしさやの中山秋きたる花
同　後九條内大臣
秋きりのへたつく中山なかなかにそてやもすそのつゆそなく
名所三十首の中　家隆為相
はるさむきをこえてゆくかせひやまのすそのさやの中山
同　為實
いはまちのすそのさやかにこそみえて中山のあとを[illegible]
開たえの中山まてつれなくてさやの中山なかなかにみえし梢の山
同　家隆為相
風さむく竹の下露袖にかかりてさやの中山なほこえかねの山
おほかたの山路のあはれはさやの中山の竹の下道の露
露にほふさやの中山一夜ねしさやの中山のあらし
さやの神もえにしそのふもとの山なる紅葉こきてくる中山
みちのくのこころのうちにさやの中山にまとふ
さやの中山
桜花匂ふ中山さやのさやかにさくらも春のさやの中山
名所三十首の中
夜ふかくこゆるさやの中山
家隆為相
ねをさへこそさやの中山

月

月すみてあくやまぢかみやこをとほくなりゆくさらの中山　為實

嘉元三年三十首歌　藤大納言典侍

かり人のやみにまよふくまなく鹿も浅茅生につくる秋の夜の月

やぬみゝや都にかよふ月かけは浅茅の宿に猶すみにけり

光明峯寺入道攝政家三十首歌　前大納言資季

やまの野の浅茅色はく秋風に月にぞなくも鹿もなく

建保三年内大臣家百首歌　従二位家隆

あさかりはみちもとよくにほふらんをみやまの月にそなくなり

百首歌中

月

むさし野ゝ草葉にしけき明ぬまにつゆもこぼれて月そやとれる

御集野鹿　後京極攝政

むさし野の志かもあかすやあきの月こよひもかけにねをやなくらむ

光明峯寺入道攝政家七首歌合月下草　民部卿為家

むさし野やおなしむさしのゝすゑとほく月をそむかぬ秋の夕くれ

秋歌中

萩のえだのつゆの玉ものけ(?)にしけきやまかげの月

文應元年七社百首

住まつとよそにみつるむかしの秋の夕くれ

内裏御會秋十首歌

秋風のさわくみなとのあきの夜のやすらふ山によるそ見えける

寛治三年八月四条宮哥合　二　三(古)

大蔵卿匡房卿

秋くれはともわかぬ山のまつの上の扉の秋の一こゑ

光台院入道二品親王五十首暁庭

法印幸清

見かへるもつよき山の松かえを霜ならてひかる庵にたゝく声

文安百首

前参議親隆卿　隆(古)　前

あさち野のすゑはそよくなれはあはれをそふる秋のゆふくれ　白毛

後鳥羽院名所百首

如願法師

あさちのゝ秋風よくもすきぬるきぬたそてや月をもみん

百首哥

寂蓮法師

とゝろくおいその原の落葉して冬まつしもにあたなくまの　松

最勝四天王院名所障子阿武原

従二位家隆卿

哥人のおくちれまゆこもるたえまよりやとる秋の夜の霜　紫く

家集秋哥中

同

時雨してこよひわかめさをしかれはなくものゝ月もなくなく　同

旧　あらしふく秋の夜寒のつよきにて袖にさそふ綿の声　同百首中歌　同い

庵歌に何方より中に

後白河院御製

明玉　山さとは秋の林さめるあらはしあらしもたてぬ庵のひと声

寿永十首哥会夜庵

後鳥羽院御製

人のふむあとのみそなくしもふかきこゑかけて鳴くさやまき

同

後九条内大臣

ともすれは月すむ峯にこゝろしてこき出て麻もあはれの衣きてけり

柿本家供百首
うちしらす紅葉乃衣ぬきつる山より出る麻の衣やきるらん　同

寳治二年百首夜麻　俊成卿女

夜すからやまのつきよりさきにたつ野原乃風に都偲ふる

弘長元年毎日一首中　民部卿為家

さゝ山に乃あさゆふ麻のたちゐにもかゝるしつくにいとゝつゆけし

頬そときこえくるみなみの山麻

一段まてよこに咲出て山家すみゆきの都

為相卿

建長七年顕朝卿家千首　杜麻

右衛門小宰相

わかさぬの杜乃下つゆこそはら小麻のかるゝなかとくは

家集杜間麻　同

そよくやまのゆふしてかけしときはなる杜の杜

家隆卿天王寺御障子

大蔵卿有家

秋ちかく生田の杜乃秋風に麻のはわけて露もこほれん

同　具親卿

秋はきに心乃色もしらすして生田の杜乃あさそよくなる

同　従二位家隆

さらぬたに田の杜の宿もふる麻のはわけの秋風そふく

百首御歌　土御門院御製

水茎のあとにもさきてける人き麻のはなかる夕風そふく　同

ちりまよふやさしき暁つけてしの都に

まくらにはおもはぬ大野になく鹿のひとつゆみのかたみの露

應安三年道宗朝臣家詩歌合萩

藤原頼清

ふるさとのおくの大野にさきてみたれいとゞ萩原ゆくゆく

永久四年七月忠隆家歌合女郎花

藤原宗国

よしなくあきの大野のをみなへし夜な夜な人の名に紅

千五百番

民部卿為家

秋はあきの大野のくさにつまこひてなきなるさをしか

草木も涙にかはくつまかくやの神山さとになく鹿

永仁元年法楽和歌

従二位家隆

つまかくすやの神山さとにひとりのきりに鹿ぞなくなる

月前鹿

後嵯峨院御製

月みてもなくさめかねてなく鹿の声もみのかきりとや思ふの山

寂信天王寺若宮障子

如願法師

さしのぼる月すくなくあらし夜をかさねてまつよひのみね山にさきそはなる

秋歌の中

権大納言為實

時鳥のなかぬまもなくしかやすらなくさつしにし山の木の葉

百首歌の中

光明峯寺入道摂政

つくえねのおのへにさえてなく鹿のつま吹風にこゑぞさむけき

為家家百首

従二位家隆

さをしかのつのくみそめしあきの山かなしきてなく秋はきにけり

三百六十首歌の中

中務卿親王

はつせ山峯さへかくす秋霧に音のみひゞく鐘やなるらん（峯の イ）

建保三年九月十三夜十首歌合暮山鐘

衣笠内大臣

夕ひゞき峯ゆくまゝに鳴まさる秋の霧のはれはさこしの山

同　権大納言経平（心）

はつせひゞく鐘のおとのみかすむなり衣うつ海の山の秋の中空

同　正三位知家（心）

秋ふかく山のはつくれ中空にすみやかに入相の声

同　隆祐朝臣

日くるゝをいそく人見てぬるきまの山のをちこちのつとめつくる鐘

同　従一位良教（心）

夕暮はまつさきわたる山やこれしらんつゝをへて入相の鐘

同　藤原為相（心）

夕きりはまつさきの山にこめて暮ぬらし今そきこゆる入相のかね（の本）

暮山鐘といふ事を　中務卿親王（鎌倉）

月まつとをやまの峯の中山さしもある妻もこそやとるらん

（新拾遺秋上）
仙洞三十首にはしめの　入道前太政大臣

中山の峯にくらしたる衣すそ吹まよふ風の暁

文治の比ひえの山にて寂蓮法師のもとへつかはしける

十首中

きく袖の露のなさけもあはれなり神山のすまゐもたへかぬるの鐘

慈鎮（和尚）

返し　寂蓮法師

そのまゝにたゝ神山のすまゐをもさそかく袖やなれにし

家集（旅宿暁）　旅宿鐘（根本）

同

秋の野を錦の山の千種にもみちしく袖のかへるさそうき

永承六年五月中納言基忠三井寺にて人々歌

よませ侍し

いつまでか常にはかはらぬ山のはの秋の紅葉を錦といひけむ

前大僧正源忠家障子絵相坂秋

法印慈忠

あふさかの千本の紅葉色みえて行人秋の色をみるなり

題しらす

法印慈海

あら山をみねにくれ行まきのはのひるのまへに麻をあくなる

野径麻　古来歌合

従三位忠基

いく秋のつまきつまきを萩の野におもひしりてや麻の鳴らん

秋雨　不聞

藤原基広

秋風やすゑかれしくる夜さへ山は麻をあくなる

弘長元年五百首麻

従二位行家

日の暮るいそのかみ小野のかりはつま妻ならん

題しらす

惟宗忠景

さを鹿のまよひし山の岩田のさやかに麻をあくなり

五十首歌の

光明峰寺入道摂政

初霜のおきのかきねのあさもかけてもねざめにゆくさをしかの声

七百首歌

権僧正公朝

こよひしもかよふ山田にまく麻の何をかよしとつまやよふらし

さを鹿のなく声しきりこよひもかくれ鳴なり

小野社百首歌の

後鳥羽院御製

さを鹿のなく野のあはれ風にたつ声すみわたる家のみゆる

秋之中　哥林抄　實清朝臣

哥花抄
あはれにや神もうけゝんつきよみの杜の木のま（?）

建長八年百首歌合　太政大臣経家

すみわたる谷のかげみちこけさえてかりほの麻のあまたたれ（?）

麻　壬二

六三
あさみちよそにきけくおく麻を（のイ）ち別なしし人や恋しき　よしの人

保延元年八月家成卿家歌合　麻　源仲正

かきりなくてうつやみてさん山田のをはやしゝなき

永久二年九月三井寺歌合　月　観意法師

二先
いかはかりくはるかに秋の月まさしくさやの麻の星もこゆらん

嘉安二年七月右大臣家歌合　暁麻　源行頼

ますらをのいきしろきくもあすれてすむ麻の暁の声

仁安三年八月経盛家歌合　麻　源師光

山風にまかする野へ（の草むらの）の麻やさしやさしのみえつゝ

百首歌　麻　重行卿

さ月もの麻もつゐやおり人もやむへきにもその木の下

家集　西行上人

五秋
さらぬたにかきねにやくもきくりもまつすみの秋のゆふ

草かくれ（古）
夕まくれ
正治二年百首
むかしは小庭によきたる麻のねに人のかよふ（?）
越前（?）入道三宗親王

仁安二年八月経盛家歌合八月

登蓮法師

月のさえゆくまゝにそ霜をとひてあつしとやなくらん

此歌の判者清輔朝臣云右歌山乃端のいてやらんとは
霜降時自鳴といふやかりけりされは秋月似夜霜云
詩にも欲知豊嶺鐘声とよみけれはなとかは
かゝ月光を霜とみてかねもなくかねてよまむ
なきにしもあらすといへとさてはあしく

雁

詠雁　讀人不知

そらやなる雁かねにてのあけつかた羽のさえは霜のおきける
今朝の朝け雁かねさむくなくなへに野辺の浅茅も色つきにけり

秋雁といふ事を　太宰大弐高遠

うち羽ふき山のねの松のかせさむみ心せね雁の声

讀人不知

父のこのあきもとおくれてかりかねのなきてわたれはさむきよの月

千五百番歌合　従二位保季

風すさふ雲のみちにや山のはの月をひきてそ秋の雁かね

寶治二年百首に初雁　信實朝臣

このたひの秋のねさめにさ夜ふけて雁のなきつる

後鳥羽院御製

初雁のこゑもあはれの秋風にすゝしき山のはの雲

最勝四天王院名所障子

とまりかね雁のこゑにそみつる秋さりゆく明けの空

○古文後集　秋風辞　秋風起兮白雲飛　草木黄落兮雁南帰

建保二年内裏詩合　後鳥羽院

松風の秋まちいてゝくるゝ夜ハ月その露おきさゆる夜哉

百首歌の中に　光明峯寺入道摂政

（万代）あひ思ふ秋はゆふけくれてのたそかれに鳴ぬるかりのこゑそきこゆる

貞應二年名所百首　民部卿為家　同

高砂のをのへのしかやいまさらの山風もまつそにほたるつゆの秋

最勝四天王院名所御障子

後久我太政大臣

とふ稲かけ鳥羽田の面にゐる雁の涙にむすふ秋の稲妻

草木黄落雁南帰といふ事を

常盤井入道太政大臣

草も木も色かはりゆく秋風に南をさしてかへるかりかね

百首歌の中に　中務卿宗尊親王

雲はれていまそきこゆる初雁のなくせの山の秋きりのそら

建保四年内裏十首歌合　正三位知家　同

しらくれにかりはさなかるおほえすをゆきて帰る秋のむら雨（明）

秋雑歌の中に　人丸

万千
あきかせやかりのつはさのおほはひとをいつこよりてか我のかなしき

寒鴻都静客愁重（千里句題）　千里

なく旅のこゑまてそふるかりねかな人そさきたちまつかりかね

家集　貫之

天雲のよそのかへるもとけるらしきこゆる初雁の声（初雁）（遠）

寛平御時后宮歌合　よみ人しらず

雁乃なく秋の夜をしもやみなれハ(?)いつしかとのミまつ君か(?)
かすみてや秋けくるかりのつまこひしさに

秋の中　古来の歌　躬恒

秋風に山とひこえてくるかりのこゑけはさきゆく雲井にそきく
八月のはつかりかねを人はあやしといふ

恵慶法師

あさまだきかりかね風をさむみ(?)かれはやけさくつらなるらむ

家集
雁のこゑ(?)みねの山やまちわひてつらなるけりとあまつ都ゆかむ

久安元年七社百首にて　民部卿

あさなさなかる雁の秋風にみやこはあふく月の夜そなき

文治六年五社百首にて　皇太后宮大夫俊成

いつしかと雁をききつるけさのこゑ明(?)けぬるをたのむ

建保三年八幡宮歌合海辺雁

後京極摂政

しら雲ははれゆくさきに雁のゆくへやいつこなるらむ

同

皇太后宮大夫俊成

いつはりの秋にとみゆるかりのあはれ中の月はたのまし

同

俊成女

松しまやをしまの磯にゐるかりの涙もぬらす袖の月かけ

喜多院入道親王家五十首にて

寂蓮法師

夕されは友をよふ鳥に雁なきて芦のまろやに夜そふけにけり

御集　夜泊雁

後徳大寺左大臣

淮南子　雁順風而飛以愛気力銜蘆而翔以避矰繳之害也

はるかりもいまそなくなるこや高砂のをのへなるらん

久安百首　前大納言隆季卿

夕くれの玉川さえてかきくもりおちくるかりもなつかしの空　同

雁そなくつらかけて渕にしからみくてしなさをまてのちし　同イ

家集雁のうたとて　権大納言実家卿

玉川さとになくさめさらしをへてし雁のつらひくなみてにこそ

御集暁更雁　鎌倉右大臣

久かたのあまとふ雁の涙かもおほあらきのもりのしつく人の家

式小屏風哥　源重之

流布本元
こころつき日をすくしつるやさしき都のききしかりかね夜

永承四年歌合　藤原清正

ここよりはつかりの鳴夜さききつへしはかくてや秋の夜の風

百首歌野雁　土御門院小宰相

わすれすよ雲井の雁そくるとのへにあきのよのそら

仙洞歌合江上月聞雁　後京極摂政

夜をかされね玉江にやとる月の影にかりのなくなりやさむき

十題百首
秋の夜の月にまつらん初雁のなきてくもゐのそらにおほかる　同

西行隠士百首
見わたせは里もてあれはし秋の霧のしくなきこの世の初雁の声　同

八月十五夜
ゆく秋にいまやとらん月になれてかりの一こゑ　同イ

法住寺殿五首寄鳥恋　家長朝臣

みるままに人の心のかりのこをとりかさねていつかこの世

建久三年九月十三夜大納言家にまいりて　前中納言定家卿

雁かねのなくになれけりひとこゑもわかぬ神の身なりけるかな

堀河院御時百首　　権中納言師時卿

雲かくれなきわたりぬとても雁の声おなしくきゝき秋の空なる

百首歌の月　　後九条内大臣

月おほろ蘆江にうつる在明の夜半にすきゆく小枝のかりかね

西園寺入道太政大臣

秋ふくと山すそわたの小田のみねふりのこされの雁の跡さきてゆく

千五百番歌合　　第三乃皇子　惟明

又渡雁のこゑのまゝとふきこく都のきりはよそにわかるる

正治二年百首　　後京極摂政

ここらくし旅の夜やまた明方の雁かねかすむ家のしるへも雲

仙洞当座歌會月前雁

都の空はしらぬ家をといひてゆく雁のわかれは風にもあかぬ夜の月

百首歌の　　慈鎮和尚

霧のまへに知らぬ夕暮も袖ぬれよすかの雁の秋の空

和歌所影供歌合江月聞雁　　如願法師

月すみしくまの浦風さむくらし入江にわたるかりかね

百首歌の　　従二位家隆卿

知られけむ雲ゐのあまたの秋のかりかね

後京極摂政家歌合須磨関秋

須磨の関にも雲ゐのわかれ雁の声すきゆくよはの関風

建保三年内裏百首歌の中に

順徳院御製

白川の関にもなれる雁のなく秋の風に白川の関

同
もしほ乃浦おきのたちかへるかりかねの都をみのかゝるいさよふ月　同
　　従二位家隆卿
同
かきつらね千里わたりのかりかねの風もやそらにまさりゆく水茎乃あと
　　正三位知家卿
同
水茎乃あとを残してゆくかりの風まつ〳〵むらあらしする
　　兵衛内侍
同
かりかね乃都にいつる秋まて〳〵まちえて聞けり風のこゑきくに風ぞ吹くなり
　　藤原康光
同
風よりもさきにこそきかれ初雁の伊駒乃山をきりかくれつゝ
　　前中納言定家卿
新後拾遺秋上
同
さよふけてなくさふよるの雁乃わかれて風のふくむさし野のみち
大治元年三條太政大臣家詩合
　　源定信
むつましみ契りすへてこしかたのさひしきまゝにかへる雁の声しき
正治二年百首　三條入道左大臣
雁かねのかきつらねたる玉章をあさみとりなる空にかくらん
同
そらしや雁かきりかくれゆくやみありし雲の初雁の声
　　源師光
家集
さ夜ふけてうちかへる雲のよそにのみきかまほしかりつる初雁の声　舟（古今集）
　　前中納言定房卿
大井河行幸に扈従にてまかりてよみける
　　花山院御製
たまほこの道もしらくもに雁かねはみちのくまても聞えける
家集
　　和泉式部

ふしみ山ゆふゐる雲にかきつらねこしかりかねのこゑきく

文応元年七社百首　民部卿為家

かへるさはふるさとの玉川さとにしるへなきかりの翅の雲のうへまき

百首歌中雲間初雁　寂蓮法師

たつかりのつくま河さへもろともにせくかたのみえぬ雲路に

文治五年五社百首雁　皇太后宮大夫俊成

同
なにはかたのしやまもし秋の雁いまきこえよかりかねのすゝめ

初雁のみえしのかはみ玉川さへかきつらねたる秋のそらかな　同

文応元年七社百首　為家

こゝろさへ時もしし神山あたりまつりきてもゝよさゝら

春日　同

をくらこのたかせさかゆる山のはにかゝれる雁のこゑきこゆ

百首歌奉りし中　藤原為顕

ともしたのやまおろしの浅茅風さむき夕くれに秋の雁かね

建長八年百首歌合　右近中将経家

大井河くたす筏士心せよもみちに雁のこゑさそふなり

同　前大納言顕朝卿

つくはねや秋風さむみゆふされはみなの田井に雁そなくなる

同　信実朝臣

峯たかき山のこのまにくるかりかねのこゑのみきこえて雲ちゆくなり

弘長元年百首　同

かりくらしなかつかされはひしきさて雁のこゑみて秋のむら雨

建保四年内裏詩歌合　参議雅経

さはれはや秋の夕くれのこゑもなく雁かねのゆくへも

最勝四天王院名所御障子

俊成卿女

たつらん雲井まして越路わたるなかへしの杉きりの空(?)

同　参議雅経

初雁乃都にゆくなれしかの浪乃大井乃橋のきりに明なん(?)

同　具親朝臣

かりかねの雲ゐさそひてやすらひもせんはかなるおくしの秋乃夕暮(?)

貞應百首　光明峯寺入道摂政

月影はいつくと雁の羽ことにそてもふりてさやけき無鶴(?)

貞應元年八月三百首詠(?)　同

かすみゆくかりかねの声のかすかに月さえてかへりかせかきゝえし(?)

ゆく雁の声のかすかに月さえてかへかせかさきゝえし(?)

建保三年秋十五首会時雁(?)

権中納言定家

二乃比のかりはの風のさむきにもきぬたもわかきそらむす客はしらぬ松の世(?)

土御門内大臣家にて　同

雁かねの雲ゐゆくらねよそく秋乃さむきよはにまた時やむなし(?)

元久仙洞詩歌合　暁聞雁

従二位家隆

きえくる在明乃月のむら雲に山とよりもなをそこしむなり(?)

喜多院入道二品親王家五十首にて

[illegible]

秋風やまつへぬるにも雁かねのおともしらてわたるなる(?)

建保元年若宮奉(?)て詠(?)

慈鎮和尚

玉はされかきつらねたるしらつゆのたまのをなかき秋風

同千五百番歌合 後京極摂政

いかにせむこの里の在明にさこのもなかりの月になくらむ

秋歌の中 初雁 二条院讃岐

おきゐるゝを山のはいての秋風に稲葉の風に初雁の声

文治六年 五社百首 皇太后宮大夫俊成

そら稀かすこのもかきみゆくらむかりかねのことをしおもへせむ

六帖題 新古 衣笠内大臣

北へゆく小田のかりかね雁のねのきゝてしてし北へゆけるか

百首歌の中 後光明峯寺摂政

山のはのいさかりの雲まくもりに声のきこゆる

同 中務卿親王

朗詠 許渾 楊柳風高雁送秋

しらすよの柳の枝をふきはらふ秋風にこそ雁はなくなれ

君がための 中納言為家

みなかみの柳の末の秋風にかりの都もたえぬかな

六帖題 権僧正公朝

くれはつる雲まにみゆるゆふくれの雁のつらなる

式部卿親王家和歌会に 兼為相

なかそらに雲ゐのかりのこゑすなり秋の山もと

海路雁といふことを 源季広

きえかへるなみのうへの浦風にたちゆくかりの羽かせのこゑ

秋歌の中 鎌倉右大臣

かりのゐる雲はとゝもにきえぬともまつ山のは

建長七年顕朝卿家続千首に 雁過湊

水茎乃あと外湊にふかりやよみえてられせみりとらかな

信實朝臣

千首　民部卿為家

わすれぬはいつとわかれかりぬ晩や秋まちえてもなしみこのやへやまきはしのん　同

（六帖新六）

八月二日鷹の頁

雲井のかりのつらもたえてやなくらん

同

光俊朝臣

泉河たちはもいまくもみちぬまこなき山出て秋なきすなり

百首歌中

此ほとや光春のこえ後乃秋風よ木葉ちいさきぬ秋なきぬ　同

七百首歌

権僧正公朝

まつ建ちさすたわたえ秋ちよ秋風よふきまいてやかりのなくらん

住吉社詩哥合

従三位行能

梅咲はるちよ花とまつりちえてよのとまきさえかけぬこさえ花も山

文應二年毎月一首中　民部卿為家

夜深や秋けさむくなき池水に芳々こめく雁なきわたる

同

秋わけ萩もの声なくかはもなきみゆるかしるさえの池　同

正嘉三年毎月一首中　同

ゆふかれの雲井の秋乃紅こい山いまや梢乃色かはる雄

文應元年毎月一首中

夕なくらいろぬさきてやかりもの小倉乃秋けふなくしも　同

永仁二年内裏詩哥合　前参議雅有

月出川をふ山のちる中をゆく秋のはしきゑみき暁乃そ

雲歟

前大僧正道慶

ちに世にまちえてなる時三和山のちかれなく

新續古今

とに神すま三輪の山風よ秋きまきて前まつて松のむらち

嵯峨院御時百首

中納言国信

天の戸のあくるをいまはまちかねしそらきやそらん 様の花ね

同　前斎宮内

雲わくるあまの岩戸をかりてこそ雲井はるかにいくつらなきなん

同　俊頼朝臣

なるみなるねをはつらんさまけ井ゆくいなさ細江にあきつきぬらし

田上にて刈る田より雁のゆくなりを

秋の田のかりをとかりのあはれにさせたかなしみかきはらひなん　内

家集初雁　源仲正

内　いくちよの初雁をみのわたらんとねおちてやそむくよすらく

雲井よりくるとつらのいはなにかはての浦よあらひまじらん　内

三百六十首中　好忠

うちむれくたるかりのこゑよあさおはるみさいくらはやれ

同

くる雁の来ゆくあとの羽をならべゆきて秋への空にしたきぬ　内

くもりなきたのむの雁そなけるなる月のかけはしたゆくて　内

むかしよりしらすかりて　ゆく

前中納言通房

しらまつなかりのおもしろきこえのこなりのはやまん

秋田

建安五年毎一首　民部卿為家

風わたる野田のくいなのそらはいまさはらくてつらひて　内

浅茅生の神田のさなへいろさはらひくさなへのはさひくらん　内

文永十年毎一首

七夕のゆきあひの田面はくみちものさまひまれらへき　内

建保四年内裏十二首詩合

そのゝ秋はけふもあはぬやせをかりてゐるなゝ昭へつゝ寄すて
光明峯寺入道摂政
文治六年五社百首
皇太后宮大夫俊成
いなをほせて風もとゝろに秋ふかき生田の里の秋の夕暮
山里は秋の松風こゝろしぬ秋くる志田の衣はかなり
家集海邊秋風を
権大納言實家
夕されは浦やの秋の風ふきて生田のをこゝめるをなかれ
家集
好忠
あはれなる秋をその稲をもいなふきさへてもや
百首中
重之
山たのそとにわかりすまして稲葉の風にふくらもやまき
屏風に田のかりするところある

恵慶法師
はるゝのそのはしらぬ秋乃田もかりつきぬるや田ぬしこゝろ
田乃べの月
西行上人
夕露の身にくまの田のいなむしろかりほにやとる月やとるらむ
寶治二年百首秋田
從二位頼氏
あきまよふ秋の田の草ばにかへる夕風
同
前内大臣
露わける草田のかりさきおゝとしまで風にて袖
山田もるあきの本せや乃さはらに又袖ぬれて秋のもみぢ
日吉社五十首中
後鳥羽院御製
あしびきの山田のいほのくれをあはれみこの下露や袖にもるらん
御集十首中
花山院御製

山田もりや稲葉そよしんかりふの秋乃夜すくなきわれかなり

家集　秋田　小弁

うちはけくおもひをふかく山田もりいかにあかさむ月はかせそ

家集田家月　源仲正

いなやりし山田に月はまかせてさくらわたるやうらさき元

御集忠に山田も秋わり

花山院御製

秋乃田をゆくる風のかりしこそや袖のうへにおもひあるらん

家集　如覚法師

佐夜ねふくのこひすてみある中くの袖のこのふまするをも

秋田中　躬恒

山田のおくての稲を刈つくそれまてかりのいそくはしもむかん

宮御所天王坊名所御障子　慈鎮（和尚）

里しむる羽田のいなおほかのゝくきりかくれゆく宿のかり

建保三年名所百首　僧正行意

秋風のこゝろのまゝにかへるつくす浦乃かせ

千五百番歌合　従二位家隆

声はかりこのゆうの風をみわたせは茎のうら秋乃山里（本カ）

題しらす　他阿上人

雁のなくる羽田のなまもかへる月影そ秋の山庵

秋田中　古来歌合　冷泉大納言

日よりいるゆたちの小田をみわたせは稲葉につくる宇治の川波

洞院摂政家百首　眺望

光俊卿

[衣手小水渋付左右殖之田乎引板吾延守有之栗子] かり山田もるの末をふく風にいなおほせ鳥の声そきこゆる

題不知

よみ人しらす

ゆふつくよ山田をみもりいさゝかのいほりに秋の風そ吹ける

秋田かるかりほのやとりにほふまてさける秋はき見れとあかぬかも

秋田かるかりいほもいまたこほたねは雁かねさむし霜もおきぬかに

衣手にみしふつくまてうへし田をひきたわかはへまもれるくるし

さほ川の水せきあけてうへし田をかるはついひはひとりなるへし

家集雑上の中

ふる郷のもりへのかのゝ田をかりほとねこしにやすらん

山田もるそふつのひたのひきつれてひさすなくのあはれとそなる

三百六十首中

好忠

わかゝとのかりたのいねのきゝもせてむらくもかゝる山のはの月

寶治二年百首 光俊卿

ひとり山田もるくさきをのらいまやかりおさむすらん

七百首の中 秋田 権僧正公朝

見わたせはいさゝ田のくれかたにしもかれてやまにきせてこそいとわれ

家集 大宰大貮高遠

秋の田のかりほのいねのひつち原あるかなきかの世をなけくかな

同 大納言経信

きりはるゝ山田のいほのいるてゐてみにこそしみれ秋の山風

三百六十首中 好忠

拂ふる宿やまもれつゝしけれとかりにはかゝるへく後の山風

西行上人へまかりける中

なをもゆく露こそかゝれ秋の田はひたすら千世の大宮のうちと

寂延法師

六帖題　新六二　衣笠内大臣

新三　秋の

わか宿の山田にかゝるひたすらにあるものゝさひし秋の中まで

三百六十番歌合　同

おしなへて山田にかれは我をのてつとめよ人々こひしき

建治元年　亀山の五十首に詠合

参議雅経　心

こゝろ山田にひたもかのかるくいなほはおやとふきし秋

田ことにてむかしの山田刈なりにく

俊頼朝臣

新古雑下

こきちるをそ山田のそほつ稀にこめて世をなほ手にすら小幡つる

○二八五七五と一つ合

新六二

六帖題　新六二

小山田のいほかこむ竹をしをきつゝおきまく寒けさゝ

光俊朝臣

正治二年七月当座三て詠人　門前稲花

後鳥羽院御製

山里の門田のいなはをしあかせてけふもまゝならぬみそき

家百首

民部卿家　心

まちさくかねをつきて未遠き山の田をとてら秋の

宝治二年百首　稲田

信実朝臣

吉川のさとらおもてすゝ小山田のいさかなもさきかりしそき

寛喜元年女御入内御屏風

前中納言定家　心

民のとのあまつそらの秋の田をかすやすく稼の年をかさねしか

現存六
秋田　秋者六

中原師光朝臣
いなむしろふくや山田の秋風に民のミつきをいそくなるかな

車　同
北五六
秋の田をみまもるいほのこのくれにいくたひ稲をはやさるらん

前中納言　定家卿カ
正治二年七月當座三百首御会

後久我太政大臣
夕暮は山おろしにやゝやまの山田の稲乃花なみよる

同
民部卿範光
色にいつる門田のいなはおきそへて風にみたるゝむらすゝめなき

同
大納言通具
いつしかとかりほのあさこほるさき小田乃いなほのかたより

寛元三年結縁経百首
民部卿為家
あけはなれ思生の稲穂いてきしよりそのをちかたやまかせ

よみ人しらす
六三
秋田
秋風はおるゝ稲葉のそよけるて袖をはなれてきよかなる
同
秋風のふけてさよかねのそれゆけくあかれぬ

永久四年九月雲居寺後番歌合　秋田
瞻西上人
をしねかる山田いなもろあれはてゝ

よみ人しらす
ほつ山田のいなほいまはかりにかゝるさきはおまして

大治元年八月摂政左大臣家歌合　稲宿雁
西住法師

いなふきし山田のかりほに標結ひてかつかつ見しもの都にきく

此哥判者俊頼卿云 下の句の五文字のいま事也

かくいねもかりほにすくへるにひとへに稲のやまと

なしかるてはてて田もるみはいさひとやかへりきくと

天喜四年四月藏人所哥合 秋田

よみ人しらす

秋の田よかりやりひさしく志川のそひとふさかへりとみゆるむらさき

大治元年八月攝政左大臣家詩合 恋

俊頼卿

秋乃田のかりほにやとる志ひゐのおほせとりなく

此哥判者俊頼卿云 田いなものなとそ詩人也

またむさしへし池中を申へきをそ侍る哉

涅槃経の若字功徳のこと 譬如耕田秋耕為勝

此経如是諸経中勝とい文を哥によめる

くすよりまさる事とそ

堀河院御時百首 仲実朝臣

ここやかりなるこのはなよてくるよそにまさるあきはきりのこゑ

家集 雑上の中 中納言家持

あしひきの山田のかりほもりなしてすまいつるともやかへかるとしも悲しき

秋上の中 讀人しらず

はるはてくもてかりほる我宿のわさかりるいまそなかるる

同 廬 かりいほ 六三

よみ人しらず

かりいてくかりつるとふとひく時よ稲葉ふかくまさりまさる

永久四年九月雲居寺結縁哥合 秋田

仲實卿

をくれてはまつひくのかけなひ打たてゝくさつもりけり秋の田ならは[illegible]

千五百番歌合　二條院讃岐

いそのかみふるのわさ田にはまてゝくの人あらいねを思ふ[illegible]

題しらす[illegible]　義淳法師

風さそふ稲葉そよくらいくはなのあきの[illegible]秋田[illegible]

三百六十番歌合　秋　大蔵卿有家

山田もるすこのあたりに風ふきて[illegible]

建長七年顕朝家歌合　田家　之後卿

そとものまへの山田をみれはすゝきこそまたさかりなれ秋風そふく

千五百番歌合　後京極摂政

いねそよくいなはの[illegible]ふるかりまくら[illegible]

同　慈鎮和尚

かりいれのかさ田かりほの[illegible]

建久二年文字[illegible]

秋の色はなみこそ[illegible]門田のおもにいふ山[illegible]

千五百番歌合　小侍従

あさこひくこのいたもかくれつゝ[illegible]秋風[illegible]

建治元年内裏歌合　大納言信[illegible]

秋風の田のかりほのうちに[illegible]

[illegible]

まてかねるいそやとく

寶治二年百首 秋田　正三位知家卿

露ふかき穂すゑのなみをかけてかりほの床に夜半そ寒けき

六帖題　新古今　民部卿為家卿

秋はあつる山田のいねもそよかせにわれかたよりに露そこほるゝ

同　信實朝臣

秋乃田のかりいほのやとりにほふまてさける秋はきみれとあかぬかも

同　新古　光俊朝臣

浦風にかたよるいねのそよきしてやかりしらるゝ秋のゆふくれ

秋田　現存六　後九條内大臣

秋風のかよふいなはの露のいろも秋田をひきて住吉乃岸

仁安三年秦良詠合判者俊成　實叡法師

そかりのいねかりのそよきこそまつきく秋のを山田

正治二年百首　源師光

初雁のそよくいねかりしとりやまつ鳴らん山田

三百六十首中　好忠

やまたの田かりのよせのひつちをもみるにつけてもねさき

永久四年百首　攝津　仲實朝臣

そともの田のかきつはた見そめてひつちのいねもなひくみゆらん

同　神祇伯顕仲

谷かけのせきの田井にかりしてすみぬるひつちかな

○稲妻

六百番歌合　稲妻　中宮権大夫家房卿

夕月夜かけろふよりの雲さへにきえかへりてそすゝしかりける　同

後京極攝政

たか明やあれたる宿のさゝかけに稲妻かけてやまの露　同

隆信朝臣

むら雲のたえまをあらそふ稲妻のひかりのかけそみえかくれする　同

家隆卿

すゝしくも沖の雲ゐにはきえてさえしくやとるひかりのかけはしるらむ

詩判に右の句にて偶見たる雲に夏頌（?）とも名をこそけきやとよふをきもすやいて潘安仁の秋興賦にも熠燿のひかる階闥にしく蟋蟀のなきくらす軒屏にあたりて朗詠集の詩に万點小螢秋草中といへるにも

百首の中　同

山田もるすまひはかりのそらねにいなつまのてらす秋風の中にまさ

永久四年百首　稲妻　源兼昌

かつきえやこすゑにひかる稲妻を山のはのうちにたてこそみれ

六帖題　衣笠内大臣　新六十二

うらゆくくものあゆみのみえわたるひかりかひのいなつま

同　信實朝臣

むら雲のそらゆくかけのひくれの田の面の雲はつきてのこるいなつま

同　民部卿為家

筑波山のみねよりおろす雲まよりおちてそめくる林のいなつま

康元二年毎日一首中　同

かりそめに同しきよみてもいなつまのやとれるはかなきつゆのいのち

稲負鳥

拾集
屏風にきりきりすの所　　頼
里ことにいなおほせ鳥のなきつなり宿やかるらむ
千恵とまちかねこさりしかは
万代　　俊子
山本にいなおほせ鳥のなくなへに秋のくれとはひとり(?)か
大和物語
百てまり　　　浅位 家隆卿
秋の田のいなおほせとりのこゑきけはこのまもいかゝ見よや
六帖題　新六十　民部卿為家
秋の田のいなおほせ鳥のきこゆなるすみ住
同　いなおほせ二三七　前中納言為家
このゆふへなおほせ鳥そ秋の道　　あそん
新六二
日　信實朝臣　　従二位行家
□やとこし刈田のなこの露の下にいなおほせ鳥のなくそさひしき
新六二
同　新六二　光俊朝臣
なきそむるいなおほせ鳥の声のうちにさそかり秋はなかくの
九年九月菊合中　為實
かきくらしきくの花はなかれて稲負鳥の秋の夕くれ
建長三年百首歌合　従二位行家
わか門にはや山田の刈はいきていなおほせ鳥の声すなり
判者　知家　云おほつかなしと侍
とりいなおほせとりも雁とすむの作とそや
無下の事也とそ

寛永十二 卯月吉

小谷様まいる

110X
495
21